

國際學術情報流通基盤整備事業
(SPARC Japan)
年報

平成 26(2014)年度

国立情報学研究所

目次

卷頭言	1
1 概要	2
1.1 第4期の活動概要	2
1.1.1 第4期の基本方針	2
1.1.2 第4期事業計画	2
1.2 平成26年度活動	3
1.2.1 SPARC Japan セミナー	3
1.2.2 海外動向調査	3
1.2.3 SCOAP ³ 支援	3
1.2.4 arXiv.org 支援	4
1.2.5 ORCID Outreach Meeting 支援	4
1.2.6 オープンアクセス支援のパイロットプロジェクトの検討	4
1.2.7 平成25年度 SPARC Japan 年報の発行	4
1.2.8 ウェブサイトの整備	4
2 委員会等開催記録	5
2.1 国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会	5
3 委員名簿	5
3.1 国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会	5
3.2 SPARC Japan セミナーワーキンググループ	6
4 SPARC Japan セミナーの記録	7
5 総合年表	8
6 刊行物一覧	18
6.1 国際学術情報流通基盤整備事業(SPARC Japan)年報	18
6.2 報告書	18
6.3 SPARC Japan ニュースレター	18
6.4 SPARC Japan セミナー資料	18
7 資料 ニュースレター再掲	20

卷頭言

平成 15 年から始まった本事業にとって、平成 26 年度は第 4 期の二年目に当たります。この一年の活動を年報としてまとめました。SPARC Japan セミナーの内容をまとめたニュースレターもすべて再録しております。

平成 26 年度は、オープンサイエンスというキーワードが広がりを見せ始めた年でした。欧米の政府関係機関のレポートにもオープンサイエンスという言葉が盛り込まれたり、海外出版社によるデータジャーナルの創刊が相次ぎました。我が国でも平成 28 年度から始まる次期科学技術基本計画の中に盛り込むことを目指して、平成 27 年 3 月に内閣府の「国際的動向を踏まえたオープンサイエンスに関する検討会」の報告が出されております。

第 4 期から本プロジェクトではオープンアクセス（OA）の推進に資する活動に重点を置いてきました。アドボカシー活動である SPARC Japan セミナーのテーマにつきましても、学術界の動向や社会的要請を背景に OA やオープンデータと我々はどのように向き合うべきかという課題を反映したものになりました。ご尽力いただいたワーキンググループのメンバーの皆様には改めて感謝の意を表します。

また、本プロジェクトのもうひとつの柱の国際連携についても、引き続き大学図書館等と連携し、arXiv.org や SCOAP³を支援すると共にそのガバナンスに参加、ORCID Outreach Meeting の日本開催等、OA のアドボカシーのための活動を広げており、今後もこれらの活動を継承していく所存です。

SPARC Japan の活動は、OA に関わるコミュニティの様々な活動を支えようとするものです。新しい学術コミュニケーションを目指す皆様の厚いご支援をお願い申し上げます。

平成 27 年 4 月 1 日
国際学術情報流通基盤整備事業委員長
安達 淳

1 概要

1.1 第4期の活動概要

1.1.1 第4期の基本方針

「国際連携の下でのオープンアクセスの推進、学術情報流通の促進および情報発信力の強化」に取り組むことを基本方針とする。第4期は、大学図書館と研究者の連携を促進するとともに、オープンアクセスの課題を把握し、大学等のとるべき対応について検討し、これに関するプロジェクトを推進する。

1.1.2 第4期事業計画

SPARC Japan 第4期の事業は次の3つを柱として計画することが、平成24年度第2回国際学術情報流通基盤整備事業運営委員会で決定した。

(1)国際的なOAイニシアティブとの協調

第3期に引き続き、SPARC、SPARC Europeとの連携を強化するとともに、個別プロジェクトにおいてもSCOAP³、arXiv.org、ORCID、COAR等の国際イニシアティブと協調しつつ国際学術情報流通基盤整備を進める。

(2)オープンアクセスの課題への対応と体制整備

大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議と協力しつつ、国際学術情報流通基盤整備を推進する。

世界的に変化の著しいビジネス環境の中で、学術情報流通の変化に学術コミュニティが適切に対応するために、大学図書館・研究者および国立情報学研究所が連携して、オープンアクセスの課題を把握し、大学等のとるべき対応について検討する。オープンアクセス誌への対応や機関リポジトリの今後を検討する。

オープンアクセスの課題について検討するために、アドボカシー活動を継続する。国内外の動向の情報収集活動を継続し、SPARC Japanセミナー等で国内に還元する。この活動には、大学図書館、研究者、学会等のコミュニティが主体的に参加できるための場を提供するとともに、速報性を高めた広報も行う。

(3)オープンアクセスに関する基礎的情報の把握

学協会誌に関する定量的・基礎的情報の把握・評価のため、第3期まで実施してきた「日本の学術情報発信状況の調査」を引き続き、継続する。

オープンアクセス誌および機関リポジトリの利用実態や投稿実態について、動向調査を行い、基礎的情報の把握に努める。

1.2 平成26年度活動

1. 1の事業計画のもと、平成26年度は次のプロジェクトを実施した。

1.2.1 SPARC Japan セミナー

アドボカシー活動として、SPARC Japan セミナーを4回実施した。各回に企画担当者を置き、企画・実施し、企画終了後、企画担当者が速報性を重視してニュースレターを発行・ウェブ配信した。

第22号（2014年9月）：大学/研究機関はどのようにオープンアクセス費用と向き合うべきか—APCをめぐる国内外の動向から考える

第23号（2014年10月）：大学におけるOAポリシー：日本版OAポリシーのモデル構築に向けて

第24号（2014年11月）：「オープン世代」のScience

第25号（2015年3月）：グリーンコンテンツの拡大のために我々はなにをすべきか？

1.2.2 海外動向調査

下記の国際会議に参加し、情報収集を行った。

・ COAR(Confederation of Open Access Repository) 2014 Annual meeting

(5月21-23日 Athens, Greece) に大学図書館員1名を派遣した。

・ OR2014 (The 9th Annual International Conference on Open Repositories)

(6月9-13日 Helsinki, Finland) にNII職員1名を派遣した。

1.2.3 SCOAP³支援

2014年から開始したSCOAP³への参加意向および連絡先を確認し、日本の大学図書館からの拠出金を、NIIがとりまとめて支払った。

SCOAP³のGoverning Council (GC)が、2014年12月17日にCERNで開催された。2014年1月から高エネルギー関係の10誌がOA化されており、その一年目の総括が行われた。日本から、近藤敬比古名誉教授（高エネルギー加速器研究機構）と安達淳委員長（国立情報学研究所）がメンバーとして参加した。

参加者数は、39人（内、9人がリモート参加、5人がオブザーバ）。MoUの数は、この一年で、19から43に増えた。その内、3は国際機関である。これを参加図書館数で換算すると2,500を越える。日本からは現在34図書館が参加している。金額でみると、この一年で、2.8MEuroから4.17MEuroへ拠出額の総額が増えた。これは一年当たりの金額である。なお、目標は5MEuroで、日本に期待される拠出額は、390,500Euroである。

SCOAP³によりOA化される論文数は着実に増えている。拠出額を算定する根拠とした2011年には当該10誌で3,552論文出版されたが、2014年中に4,287論文が発行されると予想され、平均の実効的APCは1,068Euro、約81%に下がることになる。これはGold OA誌のAPCの水準から見ても低くなっている。

SCOAP³誌の規格については、DOI付与、CC BYライセンス表示、ファイル形式とも問題ない品質で提供されており、またリポジトリとそのAPIの公開などが開始された。

1. 2. 4 arXiv.org 支援

arXiv.org は物理学のプレプリントサーバで、コーネル大学図書館が運用している。2014年12月に 100 万論文を突破し、新規登録数は年間9 万件、ダウンロード数は年間約 8,100 万件である。利用件数上位の機関の財政支援があり、2013～2017年の「arXiv 会員制プログラム」には24カ国 183 機関が参加している。

日本においては NII が各大学の意思確認を取りまとめて支援してきた。利用回数順位 300 位までの大学に会員申請の意向調査を行った結果、現在の会員数は 13 機関である。

2014 年 4 月にコーネル大学から、日本の会員館でコンソーシアムとして参加することについて打診があり、会員に確認の後、コンソーシアム契約に切り替えを行った。会費はコンソーシアム価格のため 10% 減となった。

1. 2. 5 ORCID Outreach Meeting 支援

ORCID Outreach Meeting は ORCID の活動の広報、ORCID に関する機関や関係者、および著者 ID や学術に関する情報流通に関する議論や報告が行われる会合である。2014 年 11 月 4 日に欧米以外では初めての開催となる ORCID Outreach Meeting を NII で開催した。平成 26 年 5 月、11 月に開催された理事会に、武田英明教授（国立情報学研究所）が出席し、著者識別子の普及活動にあたった。

1. 2. 6 オープンアクセス支援のパイロットプロジェクトの検討

平成 25 年度に実施した我が国における APC(Article Processing Charge)に関する調査の報告書をまとめ、平成 26 年 5 月公開し、第 1 回 SPARC Japan セミナーで報告した。

1. 2. 7 平成 25 年度 SPARC Japan 年報の発行

平成 25 年度の活動状況をまとめ、平成 26 年 7 月に発行した。

1. 2. 8 ウェブサイトの整備

平成 26 年度運営委員会資料・議事録を公開し、過年度の資料も遡及して掲載することとした。

2 委員会等開催記録

2.1 國際學術情報流通基盤整備事業運営委員会

開催日	議題
第1回 平成27年1月15日	1. 前回議事要旨（案）について 2. 平成26年度SPARC Japan事業の中間報告について【報告】 3. 平成27年度SPARC Japanの活動計画について【審議】 4. SPARC Japanの今後の活動方針について【審議】 5. その他
第2回 平成27年3月19日	1. 前回議事要旨（案）について 2. 平成26年度SPARC Japan事業の中間報告について【報告】 3. 平成27年度SPARC Japanの活動計画について【審議】 4. SPARC Japanの今後の活動方針について【審議】 5. その他

3 委員名簿

3.1 國際學術情報流通基盤整備事業運営委員会

氏名	所属・役職	備考
逸村 裕	筑波大学 図書館情報メディア系教授	1号委員 (研究教育職員)
野崎 光昭	高エネルギー加速器研究機構 教授	1号委員 (研究教育職員)
今井 浩	東京大学大学院 情報理工学系研究科教授	1号委員 (研究教育職員)
阿部 修人	一橋大学経済研究所 教授	1号委員 (研究教育職員)
倉田 敬子	慶應義塾大学 文学部教授	1号委員 (研究教育職員)
土屋 俊	独立行政法人 大学評価・学位授与機構教授	1号委員 (研究教育職員)
森 重文	京都大学数理解析研究所 教授	1号委員 (研究教育職員)
関川 雅彦	東京大学附属図書館 事務部長	2号委員 (大学図書館関係者)
関 秀行	慶應義塾大学メディアセンター 本部課長	2号委員 (大学図書館関係者)
林 和弘	科学技術・学術政策研究所 科学技術動向研究センター 上席研究官	3号委員 (学会の関係者)

安達 淳	国立情報学研究所 学術基盤推進部長	委員長
尾城 孝一	国立情報学研究所 学術基盤推進部次長	

3.2 SPARC Japan セミナーワーキンググループ

氏名	所属・役職
金藤 伴成	東京大学附属図書館 情報サービス課相互利用係長
砂押 久雄	東京工業大学 研究推進部情報図書館課情報管理グループ長
南山 泰之	国立極地研究所 情報図書室一般職員
三角 太郎	千葉大学附属図書館 利用支援企画課副課長
堀井 洋	一般社団法人 学術資源リポジトリ協議会代表理事
林 和宏	名古屋工業大学附属図書館 学術情報課情報総務係長
三根 慎二	三重大学 人文学部文化学科講師
天野 絵里子	京都大学 学術研究支援室特定専門業務職員
佐藤 翔	同志社大学 社会学部教育文化学科助教
土出 郁子	大阪大学附属図書館 利用支援課専門職員
榎木 英介	近畿大学 医学部病理学教室講師
西薗 由依	鹿児島大学学術情報部 情報サービス課情報調査支援係主任

4 SPARC Japanセミナーの記録

平成 26 年度 SPARC Japanセミナー実施記録

回	実施日	講師 (所属)	形態	参加人数
1 平成 26 年 8 月 4 日 (月) (NII 12階会議室)	大学研究機関はどうのようにオーブンアクセス費用と向き合ふべきか—APC をめぐる国内外の動向から考える	○金藤 伸成 (東京大学附属図書館) ○井上 敏宏 (京都大学附属図書館) ○斎藤 秀樹 (旭川医科大学附属図書館) ○高川 美彩 (日本原子力研究開発機構) ○三根慎二 (三重大学人文学部) ○天野 慎里子 (京都大学学術研究支援室) ○三根 慎二 (三重大学人文学部) ○Stuart M. Shieber (Harvard University) ○林 和宏 (名古屋工業大学附属図書館/DRF) ○寺田 美樹 (北陸先端科学技術大学院大学附属図書館) ○Anders Karlsson (エルゼビアグローバル・アカデミック・リオレーシヨンズ)	オーブン	129
2 平成 26 年 9 月 26 日 (金) (NII 12階会議室)	大学における OA ポリシー：日本版 OA ポリシーのモデル構築に向けて	○Antoine E. Bocquet (NPG ネイチャー アジア・ペシフィック) ○西薗 由依 (鹿児島大学附属図書館/DRF) ○岩崎 秀雄 (大阪大学附属図書館) ○土出 郁子 (早稲田大学理工学術院) ○山田 俊幸 (早稲田大学米沢嘉博記念図書館) ○竹澤 慎一郎 (明治大学先端科学アズ株式会社) ○駒井 章治 (奈良先端科学技術大学院大学) ○堀川 大輔 (慶應義塾大学 SFC 研究所) ○佐藤 翔 (同志社大学)	オーブン	82
3 平成 26 年 10 月 21 日 (火) (学術総合セントター2 階中会議場)	「オーブン世代」の Science	○天井 泰之 (千葉大学附属図書館) ○南山 南 (国立極地研究所) ○山下 介 (京都大学宇宙総合学研究ユニット) ○武田 英明 (国立情報学研究所情報学プリシップル研究系) ○堀井 洋 (一般社団法人学術資源預りボジトリ協議会) ○林 和弘 (科学技術・学術政策研究所)	オーブン	68
4 平成 27 年 3 月 9 日 (月) (NII 12階会議室)	グリーンコンテンツの拡大のために 我々はなにをすべきか?	合計 平均		355 89

5 総合年表

年度	評議会 運営委員会	主催イベント	その他のイベント
平成 15 (2003)	06/25 第 1 回評議会 07/14 事業参画提案の募集開始	07/02 学協会向け事業説明会（於：日本教育会館）	
	08/01 第 1 回運営委員会	08/19 事業説明会（於：東北大学 東北大学附属図書館との共催）	
09/11 第 2 回運営委員会			
09/17 第 2 回評議会（事業参画提案決定）			
09/17 記者発表			
10/08 作業グループ合同会議			
		11/05 第 5 回図書館総合展フォーラム「SPARC/JAPAN：日本の国際学術コミュニケーションの変革」開催（於：東京国際フォーラム 国立大学図書館協議会・私立大学図書館協会主催）	
		11/20 国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォース（生物系、物理系、医学系の購読交渉）	
		01/21-29 Project Euclid 説明会（於：学術総合センター、東北大学、京都大学、名古屋大学）	
		02/23 SPARCJAPAN 総会：参加学会への成果報告、新雑誌創刊構想説明（於：学術総合センター）	
		03/11 SPARCJAPAN セミナー：生物系学会誌をめぐる学術情報流通体制の将来 -UniBio Press のめざすもの-（於：東京大学附属図書館）	
		03/22 第 3 回運営委員会	
	03/23 第 3 回評議会		
平成 16 (2004)	05/28 第 1 回運営委員会 06/02 第 1 回評議会	06/07 参画提案募集開始	07/01 国立大学図書館協会総会ワークショップ：「国際学術情報流通基盤整備事業の活動」（於：大阪大学コンベンションセンター）
			07/07 学協会向け事業説明会（於：学術総合センター）
	09/15 第 2 回運営委員会		

	09/22 第2回評議会（事業参画提案選定）	09/27 Project Euclid懇談会（Project Euclidへの参画に関する技術的打ち合わせ、DPubSについての説明）	10/15 シンポジウム：学会出版と学術コミュニケーション活動の変革～SPARC/JAPAN を事例として～（於：広島大学中央図書館広島大学図書館、国立情報学研究所、国立大学図書館協会国際学術コミュニケーション委員会共催）	10/19-20 Project Euclid DPubS Conferenceに参加（於：コーネル大学総合学術情報センター（社）高分子学会、（社）電子情報通信学会、東北数学雑誌編集委員会、（社）日本機械学会、（社）日本金属学会、（社）日本動物学会、（社）日本分析化学会、日本哺乳動物卵子学会、日本哺乳類学会、国立情報学研究所共催）
	10/14 作業グループ合同会議	10/05 OUP懇談会「Open Access の現状について」	11/05 OUP懇談会「Open Access の現状について」	11/25 第6回図書館総合展フオーラム「学術コミュニケーションの最先端：オープン・アクセスとセルフアーカイブ」（於：パシフィコ横浜）
	11/27 ワークショップ「電子ジャーナルのビジネスモデル構築と学術出版をめぐる動向」（於：日本教育会館）			
平成17 (2005)	03/07 第3回運営委員会	03/10 第3回評議会	03/19 SPARC/JAPAN 連続セミナー第1回「Natureの歴史、今、未来を語る—Natureの編集方針」	06/21-22 JISC International Solutions for the Dissemination of Researchに出席、討議（ロンドン）
	06/06 第1回運営委員会	06/08 第1回評議会	06/29 SPARC/JAPAN 連続セミナー第2回「電子投稿査読システムとは何か—今、日本で使えるシステム」JST「J-STAGE」投稿査査システム	07/07-08 エルゼビア・ライブラー・コネクト・セミナー2005「ユーチャンゼビア・ライブラーと理解する（Understanding Users）」（於：京都・東京、エルゼビア・ジャパン主催、NII後援）
			07/15 SPARC/JAPAN 連続セミナー第3回「オープン・アクセスの理念と実践—研究者・図書館・学術誌」	

	07/20 UniBio Press の挑戦－学会の新しいビジネスモデル（於：茨城大学 茨城大学図書館主催）	09/15 山口大学図書館セミナー2005 「日本の電子ジャーナルの現況」 学術コミュニケーションの今 日：SPARC/JAPAN の挑戦（於：山口大学学術情報機構図書館主催）
09/22	SPARC/JAPAN 連続セミナー第4回 「電子ジャーナルを作成し、どう公開するか－学協会、企業の試み」	09/16 京都大学学術情報・電子ジャーナルシンポジウム 「「大学における学術情報資源の整備－電子ジャーナル時代の学術コミュニケーションの変革－」（於：京都大学 京都大学附属図書館とNIIの共催）
10/06	SPARC/JAPAN 連続セミナー第5回 「主体である研究者は何をすべきか－電子ジャーナル時代を迎えて」（於：つくば国際会議場社団法人日本動物学会第76回大会開催シンポジウムとの共催）	
10/13 第2回運営委員会		
10/26 第2回評議会（事業参画提案選定）		
11/24	SPARC/JAPAN 連続セミナー臨時回 「Journal of Bioscience and Bioengineering WEB 投稿審査システム」説明会・デモンストレーション	
11/30	SPARC/JAPAN 連続セミナー第6回 「第7回図書館総合展フオーラム COUNTER プロジェクト：オンライン利用統計の国際標準について」（於：ハシフィコ横浜）	
12/01	COUNTER プロジェクトに関するクローズド・ワークショッピング	12/09 長崎大学附属図書館連続講演会第二回講演会 「学術情報発信の新しい動向」：SPARC/JAPAN の活動と課題（於：長崎大学附属図書館主催）
12/12	SPARC/JAPAN 連続セミナー第7回 「日本の学術誌における英文校閲を考える」	
01/31	SPARC/JAPAN 連続セミナー第8回 「学術情報流通をめぐる最近の動向と技術標準：Google Scholar、CrossRef、OAI-PMH、etc.」	
02/15 第3回運営委員会		
02/24 第3回評議会		
平成18 (2006)		
06/30	SPARC Japan 連続セミナー2006第1回 「海外商業出版社から見た日本の学術コミュニケーション」	03 米国研究図書館協会 (ARL) とMOUを締結
07/26	SPARC Japan 連続セミナー2006第2回 「e-Journal の販促とライセンシング：海外の状況と海外市场における日本ジャーナルの展望」（於：東京・大阪、エルゼビア・ジャパン主催、NII後援）	07/03-04 エルゼビア・ライブリ・コネクト・セミナー2006 「From “Search” to “Find”～必要な情報を見つけやすい環境づくり～」（於：東京・大阪、エルゼビア

	09/08 第1回運営委員会	09/05 Sally Morris 氏講演会 「Introducing ALPSP」
	09/29 SPARC Japan 連続セミナー2006 第3回 「Web投稿審査システムの検証：ビフォーアフター」	
	11/02 SPARC Japan 連続セミナー2006 第4回 「大学図書館から学術出版社への要望：COUNTERを例にして」	
	11/20 第8回図書館総合展フオーラム 「TRANSFER—出版社間のジャーナル移行に伴う問題点とその解決に向けて」(於：バシフィコ横浜)	
	12/14 SPARC Japan 連続セミナー2006 第5回 「著作権：学会の権利、著者の権利、機関リポジトリへの対応」	
	12/18 19 「デジタル巨人の肩の上に立つ」 機関リポジトリ、e-サイエンス、および学術コミュニケーションの将来に関する国際シンポジウム (於：都市センターホール)	
	01/30 SPARC Japan 連続セミナー2006 第6回 「e-Journal の販売とライセンシング(2)・販売のプロに学ぶ成功的な秘訣」	
	03/05 SPARC Japan 連続セミナー2006 第7回 「計量書誌学からジャーナル・論文のパフォーマンスを測る」	
平成19 (2007)		05/15 UniBio Press セミナー 「生物系ジャーナルの挑戦—より明確に、より広く、その情報を伝えるために」(於：学術総合センター UniBio Press 主催)
		05/17 UniBio Press セミナー 「生物系ジャーナルの挑戦—より明確に、より広く、その情報を伝えるために」(於：京都大学附属図書館 UniBio Press 主催)
06/12 パートナー誌合同会議	07/17 SPARC Japan 連続セミナー2007 第1回 「計量書誌学からジャーナル・論文のパフォーマンスを測る-2-」	08/05-11 41th IUPAC (International Union of Pure and Applied Chemistry) 化学会議出展 (トリノ)
07/19 第1回運営委員会		08/20-22 234th ACS 秋季大会出展 (ボストン)
	10/02 SPARC Japan 連続セミナー2007 第2回 「Web投稿審査システムの検証」ペート3稿より良いシステムを目指してー」	

		11/02 SPARC Japan 連続セミナー2007 第3回「メタデータ Publishing の現在—電子ジャーナル主体の製作・出版に必要なもの」	11/07-09 第9回図書館総合展示会（於：パシフィコ横浜）
		11/09 第9回図書館総合展ブレゼンテーション「日本の英文トップ電子ジャーナルの挑戦—図書館総合展ブレゼンテーションパートナー誌からの提案ー」（於：パシフィコ横浜）	
12/14	ペートナー誌と大学図書館の合同会議 [SPARC Japan パートナー誌のコンソーシア購入に向けて]	01/17 SPARC Japan ALPSP 特別セミナー（第4回 SPARC Japan 連続セミナー2007）「学術出版と学会 Journal Publishing and Scholarly Societies」	
		01/18 ALPSP トレーニングコース「Introduction to Journal Publishing」	
平成 20 (2008)	02/29 第2回運営委員会	04/22 SPARC Japan セミナー2008 第1回「研究成果発表の手段としての学術誌の将来」 06/24 SPARC Japan セミナー2008 第2回「学術出版と XML 対応-日本の課題」 07/10 SPARC Japan セミナー2008 第3回「韓国コンソーシアム事情 - 海外展開を目指して -」	06/15-17 SLA (Special Libraries Association 米国専門図書館協会) 年次総会出展（シアトル） 06/26 第55回国立大学図書館協会総会出展（於：東北大学） 07/13-15 中国化学会学術年会出展（於：天津） 08/17-19 236th ACS National Meeting & Exposition 出展（於：フィラデルフィア） 09/02-03 RIDMS 研究集会（第4回 SPARC Japan セミナー2008）「紀要の電子化と周辺の話題」（於：京都大学数理解析研究所京都大学数理解析研究所主催）
			09/11-12 私立大学図書館協会総会出展（於：國學院大學） 09/16-20 2nd EuCheMS Chemistry Congress 出展（於：トリノ） 09/25-26 KESLI (Korean Electronic Site License Initiative) 電子情報 EXPO での発表、出展（於：大田）
		10/14 SPARC Japan セミナー2008 (Open Access Day 特別セミナー) 「日本における最適なオープン・アクセスとは何か？」	10/12-15 15th North American ISSX (International Society for the Study of Xenobiotics) Meeting の広報（於：サンディエゴ）
		10/27-30 ISAP2008 (International Symposium on Antennas and Propagation) 出展（於：台湾）	

		11/13-14 INFOPRO2008 プロダクトレビュー 参加・出展 (於：日本科学未来館)
	11/17-18 SPARC Digital Repositories Meeting 2008 (於：ボルチモア SPARC、SPARC Europe、SPARC Japan 共同主催)	
11/25	SPARC Japan セミナー第6回「IFを越えて・さらなる研究評価の在り方を考える」	
11/27	SPARC Japan セミナー2008第7回(第10回図書館総合展・学術情報オープンサミット2008 フォーラム)「Open Access Update」	
12/16	SPARC Japan セミナー2008 第8回「日本で使える電子ジャーナルプラットフォーム」	12/17-20 EUC2008 (International Conference On Embedded and Ubiquitous Computing) 出展 (於：上海)
12/24	第1回運営委員会	01/22-26 Project Euclidと数学系ジャーナルの打ち合せ (於：国立情報学研究所、京都大学、東京工業大学)
03/10	第2回運営委員会	02/13 SPARC Japan セミナー2008第9回「SPARC Japan 選定誌がやつてきたこと」
03/27	パートナー誌合同会議	03/16-20 APS March Meeting 2009 (米国物理学年会) 出展 (於：エリザベスバーグ)
平成21 (2009)	第3回運営委員会	<p>06/25 SPARC Japan セミナー2009 第1回「研究者は発信する－多様な情報手段を用い、社会への拡がりを求めて」</p> <p>08/04 SPARC Japan セミナー2009 第2回「非営利出版のサステイナビリティとは－OUPに学ぶ」</p> <p>09/08-09 RIMS 研究集会 (第3回 SPARC Japan セミナー2009) 「数学におけるデジタルライブリー構築へ向けて－研究分野間の協調のもとに」</p> <p>09/17 日本動物学会 (第4回 SPARC Japan セミナー2009) 「ZSプロジェクトについて」</p> <p>10/20 Open Access Week (第5回 SPARC Japan セミナー2009) 「オープンアクセスのビジネスモデルと研究者の実際」</p> <p>11/11 第6回 SPARC Japan セミナー2009 (第11回図書館総合展 学術情報オープンサミット2009 フォーラム) 「NIH Public Access Policyとは何か」</p>
		11/25 第9回アジア太平洋生物化学工学会議 (APBioChEC 2009) に SPARC Japan の化学生物系パートナー誌が出演

		12/03-04 DRIFIC 2009 デジタルリポジトリ連合国際会議 2009 (於：東京工業大学 DRF (デジタルリポジトリ連合) & NII の共催)
12/11	第 7 回 SPARC Japan セミナー—2009 「人文系学術誌の現状—機関リポジトリ、著作権、電子ジャーナル」	
02/02	第 8 回 SPARC Japan セミナー—2009 [Marketing to Libraries Worldwide]	
02/03	ALPSP トレーニングコース [Effective Journals Marketing]	
03/23	第 2 回運営委員会	
平成 22 (2010)		
06/23	第 1 回 SPARC Japan セミナー—2010 「学会の仕事とその経営を知る」	
07/06	第 2 回 SPARC Japan セミナー—2010 「ジャーナル出版—海外学会の現状」	08/19 International Congress of Mathematicians (国際数学者会議) に出席
08/24	第 3 回 SPARC Japan セミナー—2010 「図書館の仕事を知る - 学術雑誌の購読と利用 -」	08/22-26 American Chemical Society (ACS) 2010 年秋季大会に出席
09/16	SPARC Japan セミナー—2010 (RIMS 研究集会) 「数学におけるデジタルライブライ一構築へ向けて」	08/29-09/02 3rd EuCheMS Chemistry Congress (第 3 回ヨーロッパ化学会議) に出席
09/24	第 5 回 SPARC Japan セミナー—2010 (社団法人日本動物学会第 81 回大会) 「日本の学術情報流通 10 年後を見据えて」	
10/20	第 6 回 SPARC Japan セミナー—2010 Open Access Week 「日本発オープンアクセス」	
11/08- 09	SPARC Digital Repositories Meeting (デジタルリポジトリ会議) (於：ボルチモア SPARC、SPARC Europe、SPARC Japan 共催)	

	<p>12/10 シンポジウム「大学からの研究成果オープンアクセス化方針を考える」(於：東京大学 国立大学図書館協会とNIIの共催)</p> <p>01/14 第7回 SPARC Japan セミナー2010 「著者IDの動向」</p> <p>02/03 第8回 SPARC Japan セミナー2010 「世界における”日本の論文／日本の学術誌”のインパクト」</p> <p>03/08 TIB (ドイツ技術情報図書館) / ZB MED (ドイツ医学中央図書館) / NII (国立情報学研究所) MoU 締結記念講演会 「ドイツと日本における学術情報流通基盤の未来」(於：学術総合センター 東京ドイツ文化セシターとの共催)</p>	<p>08/28-09/01 American Chemical Society (ACS) Fall 2011 National Meeting & Exposition (第242回国米国化学会秋季大会) に出席 (於：デンバ―)</p> <p>09/04-09 14th Asian Chemical Congress 2011 (14 ACC) (第14回アジア化学会議) に出席(於：バンコク)</p> <p>10/26 2011 Open Access Korea(OAK) Conference での発表 (於：ソウル)</p>
平成23 (2011)	<p>10/06 第1回運営委員会</p>	<p>10/28 第1回 SPARC Japan セミナー2011 Open Access Week 「OA出版の現況と戦略 (ジャーナル出版の側から)」</p> <p>12/06 第2回 SPARC Japan セミナー2011 「今時の文献管理ツール」ワーキンググループ</p> <p>01/31 第3回 SPARC Japan セミナー2011 「学術情報流通の新たな展開 – 研究者・学会とオープンアクセス –」</p> <p>02/10 第4回 SPARC Japan セミナー2011 「学術情報流通の未来を切り開く – 電子ジャーナルの危機とオープンアクセス –」</p> <p>02/29 第5回 SPARC Japan セミナー2011 「OAメガジャーナルの興隆」</p> <p>03/26 第6回 SPARC Japan セミナー2011 「数学出版に関するワークショップ」(於：東京理科大学 Project Euclid 主催、日本数学学会共催ワークショップ)</p>

	03/27 第2回運営委員会	
平成 24 (2012)		
05/25 第1回 SPARC Japan セミナー2012「学術評価を考える」	06/19 第2回 SPARC Japan セミナー2012「ジャーナルの発展をもとめて～プラットフォーム移築を中心にして」	07/02-07 European Congress of Mathematics (ECM) に出席 (於：グラフ、ポーランド)
07/25 第3回 SPARC Japan セミナー2012「平成25年度科学研究費補助金(研究成果公開(促進費) 改革」	08/23 第4回 SPARC Japan セミナー2012「研究助成機関が刊行するオープンアクセス誌」	08/19-21 American Chemical Society (ACS) Fall 2012 National Meeting & Exposition (第244回米国化学会秋季大会) に出席 (於：フィラデルフィア)
10/26 第5回 SPARC Japan セミナー2012「Open Access Week－日本におけるオープンアクセス、この10年これから10年」	12/04 第6回 SPARC Japan セミナー2012「オープンアクセスによって図書館業務はどう変わるのであるのか～図書館のためのオープンアクセス講座～」	08/26-30 4th EuCheMS Chemistry Congress (第4回ヨーロッパ化学会議) に出席 (於：ブラハ)
12/10 第1回運営委員会	02/19 第7回 SPARC Japan セミナー2012「図書館によるオープンアクセス財政支援」	12/26-27 RIMS 共同研究 研究会にて基調講演 (於：京都大学)
03/26 第2回運営委員会		

平成 25 (2013)	06/07 第1回 SPARC Japan セミナー—2013「SPARC と SPARC Japan のこれから」	08/06 第1回 OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキンググルーブ開催
	08/23 第2回 SPARC Japan セミナー—2013「人社系オープンアクセスの現在」	10/02 第2回 OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキンググルーブ開催
	10/25 第3回 SPARC Japan セミナー—2013「オープンアクセス時代の研究成果のインパクトを再定義する：再利用と Altmetrics の現在」	12/04 SCOAAP ³ と MOU を締結
	12/19 第4回 SPARC Japan セミナー—2013「今日の問題を解く、学術情報の受信と発信—Think Globally, Act Locally」	01/27 RIMS 共同研究 研究会にて基調講演 (於：京都大学)
	02/07 第5回 SPARC Japan セミナー—2013「アジアを吹き抜けるオープンアクセスの風—過去、現在、未来」	03/02 COAPI Meeting へ参加 (於：カンザシティ)
		03/03-04 SPARC 2014 Open Access Meeting 本会議への参加 (於：カンザスシティ)
	03/24 第1回運営委員会	03/13 第3回 OA ジャーナルへの投稿に関する調査ワーキンググルーブ開催
平成 26 (2014)		05/21-23 COAR(Confederation of Open Access Repository) 2014 Annual meeting への参加 (於：アテネ)
	08/04 第1回 SPARC Japan セミナー—2014「大学研究機関はどうにオープンアクセス費用と向き合うべきか—APC をめぐる国内外の動向から考える」	06/09-13 OR2014 (The 9th Annual International Conference on Open Repositories)への参加 (於：ヘルシンキ)
	09/26 第2回 SPARC Japan セミナー—2014「大学における OA ポリシー：日本版 OA ポリシーのモデル構築に向けて」	10/21 第3回 SPARC Japan セミナー—2014「「オープン世代」の Science」
		03/09 拡大のために我々はなにをすべきか？」
01/15 第1回運営委員会		
03/19 第2回運営委員会		

6 刊行物一覧

6. 1 国際学術情報流通基盤整備事業 (SPARC Japan) 年報

http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/annual/pdf/sparc_annual_2013.pdf

6. 2 報告書

『オープンアクセスジャーナルによる論文公表に関する調査』報告書（平成 26 年 5 月）

http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/report/pdf/apc_wg_report.pdf

6. 3 SPARC Japan ニュースレター

・SPARC Japan NewsLetter 第 22 号（2014 年 9 月）

<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-22.pdf>

・SPARC Japan NewsLetter 第 23 号（2014 年 10 月）

<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-23.pdf>

・SPARC Japan NewsLetter 第 24 号（2014 年 11 月）

<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-24.pdf>

・SPARC Japan NewsLetter 第 25 号（2015 年 3 月）

<http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/PDF/sj-NewsLetter-25.pdf>

6. 4 SPARC Japan セミナー資料

【第 1 回 SPARC Japan セミナー 2014】（平成 26 年 8 月 4 日）

「大学/研究機関はどのようにオープンアクセス費用と向き合うべきか—APC をめぐる国内外の動向から考える」

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20140804.html>

「趣旨/概要説明」 金藤 伴成（東京大学附属図書館）

「オープンアクセスジャーナルに関する平成 25 年度実施の 2 調査概要」

井上 敏宏（京都大学附属図書館）

「小規模大学図書館における APC 把握の事例」 樋口 秀樹（旭川医科大学図書館）

「JAEA 図書館における投稿料の助成と研究成果の一元管理の事例について」

早川 美彩（日本原子力研究開発機構）

「APC をめぐる国際的動向」 三根 慎二（三重大学人文学部）

【第 2 回 SPARC Japan セミナー 2014】（平成 26 年 9 月 26 日）

「大学における OA ポリシー：日本版 OA ポリシーのモデル構築に向けて」

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20140926.html>

「概要説明」 天野 絵里子（京都大学学術研究支援室）

「オープンアクセス方針の現状」 三根 慎二（三重大学人文学部）

“How scholarly communication goals affect the design of open access policies”

Stuart M. Shieber (Harvard University)

「リエージュ大学から学ぶ OA ポリシー策定方針」

林 和宏 (名古屋工業大学附属図書館)

「JAIST 学術研究成果リポジトリにおける論文公開の取り組み」

寺田 美樹 (北陸先端科学技術大学院大学附属図書館)

「エルゼビアにおけるオープンアクセスの進展：最新情報」

Anders Karlsson (エルゼビアグローバル・アカデミック・リレーションズ)

“Macmillan Science and Education (MSE)- an Open Research Publisher”

Antoine E. Bocquet (NPG ネイチャー アジア・パシフィック)

【第 3 回 SPARC Japan セミナー2014】（平成 26 年 10 月 21 日）

「「オープン世代」の Science」

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20141021.html>

「概要説明」 土出 郁子 (大阪大学附属図書館)

「Alternative な生命探究の場としてのバイオメディアアート」

岩崎 秀雄 (早稲田大学理工学術院)

「コンテンツとしてオープンに発表される研究活動について -ニコニコ学会 βなどを通じて」 山田 俊幸 (明治大学米沢嘉博記念図書館)

「国内発の国際的総合科学学術誌 Science Postprint, SPARC から始まり SPARC に至り…」

竹澤 慎一郎 (ゼネラルヘルスケア株式会社)

「「若手アカデミー」というプラットフォーム」

駒井 章治 (奈良先端科学技術大学院大学)

「アカデミア外における知のオープンアクセスがもたらす未来」

堀川 大樹 (慶應義塾大学 SFC 研究所)

【第 4 回 SPARC Japan セミナー 2014】（平成 27 年 3 月 9 日）

「グリーンコンテンツの拡大のために我々はなにをすべきか？」

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20150309.html>

「開会/概要説明」 三角 太郎 (千葉大学附属図書館)

「図書館によるデータ管理への道筋」 南山 泰之 (国立極地研究所)

「大学博物館における学術資料情報のオープン化に関する取組み」

山下 俊介 (京都大学宇宙総合学研究ユニット)

「機関リポジトリと DOI- JaLC における DOI 付与について -」

武田 英明 (国立情報学研究所)

7 資料 ニュースレター再掲



SPARC® Japan

NewsLetter

NO.22 2014年9月

■ 第1回 SPARC Japan セミナー 2014

「大学/研究機関はどのようにオープンアクセス費用と向き合うべきか -APC をめぐる国内外の動向から考える」

2014年8月4日(月) 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者:129名

2014年第1回 SPARC Japan セミナーは、Article Processing Charge(以下、APC)に焦点を当てました。オープンアクセスジャーナル(以下、OA ジャーナル)に関する国内の2つの調査報告、APC 処理を行っている大学図書館、研究機関からの事例報告を通して国内の現状把握を行うとともに、APC をめぐる国際的な動向、APC の助成において取り得るシナリオを紹介し、今後 APC にどのように取り組むべきかについて議論しました。SPARC Japan 調査結果からも明らかのように、日本ではオープンアクセスポリシーの策定も含めて APC への検討が遅れしており、喫緊の課題として捉えづらいテーマではありましたが、今回のセミナーを導入編として、今後 APC への取り組みの議論が応用・実践編へつながることが期待されます。セミナー概要は以下のとおりです。当日の配布資料等含め詳細は SPARC Japan の web サイトをご覧ください。<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20140804.html>

講演

オープンアクセスジャーナルに関する 平成25年度実施の2調査概要 井上敏宏(京都大学附属図書館)

1. SPARC Japan「オープンアクセスジャーナルによる論文公表に関する調査」

①アンケート調査

OA ジャーナルへの論文掲載の多い機関に加え、医学部以外で構成される研究大学を数大学加え、44 大学の自然科学系分野の研究者を対象に実施した。

<調査結果のまとめ>

- OA ジャーナルでの論文発表率は、分野による差が大きい。

- 研究者の意識では、「投稿雑誌の決定において「オープンアクセスであること」は重要ではなく、「分野における評価」「雑誌の対象範囲と論文の合致」「適切な査読が提供」といった従来からある決定要因のまま。これらに適合

する OA ジャーナルに投稿している傾向がみられる。

- 自由記述において「高額な掲



載費用」ゆえに、「国あるいは大学レベルでの補助」を求める機関負担モデルに関わっていくべき、といった意見も見られた。

②インタビュー調査

より詳細な状況を把握するため、アンケート調査対象とした大学の中から数校の協力を得て、担当者レベルでインタビューを行った。

<調査結果のまとめ>

- 大学図書館において、APC をめぐる問題は認識されている。研究者にも APC に対する認知は浸透しつつあると図書館は認識している。

- ほとんどの大学図書館では APC の支払には関与していない。また、支払状況を把握しようという動きもない。

- 大学としてオープンアクセスポリシーを持っていると回答した機関はなく、OA ジャーナルを含む学術リソースの確保と研究発信力強化をどのように位置づけるかが今後の大きな課題である。

<SPARC Japan からの提案>

- 従来の購読契約のみでなく、APC の支払額を含めた大学全体としての雑誌の支出額を把握していく必要がある。

- 関係者は APC の機関負担モデルや適切な価格設定等について検討していく必要がある。

電子ジャーナルの購読の確保、機関リポジトリによる研究発信の支援に加え、「研究者が APC を負担する OA ジャーナル」まで視野に含めて図書館が役割を果たしていく

べきではないか。

2. 国立大学図書館協会学術情報委員会学術情報流通検討小委員会「平成 25 年度調査報告: オープンアクセスジャーナルと学術論文刊行の現状—論文データベースによる調査—」

OA ジャーナル(APC 要・不要ともに)、購読型ジャーナルも含めて、自然科学系論文の刊行状況について、Web of Science の SCI のデータを基に調査した。

2003 年から 2012 年の 10 年間における論文数の推移を 3 年おきに把握することを行った。SCI の WC という雑誌の分野データを使用して、分野ごとに日本と海外との比較を行った。

<調査結果のまとめ>

・ジャーナル数、論文数ともに増大し続けている。

調査前は、OA ジャーナルが増えているなら、購読型ジャーナルは減っていると推測したが、実際は両方とも増えている。

・OA ジャーナルの数は多くない。分野によるが、全体の 3-9% にとどまる。一方で伸びは急激である。

・購読型ジャーナルは 9 割超と依然多い。図書館の購読費の悩みは続く。

国別の論文数の傾向を見ると、10 年間でアメリカ、イギリス、ドイツは微増(1.29、1.30、1.35 倍)、中国は急増している(3.85 倍)。一方、日本は減少している(0.98 倍)。気になる結果だが、質の低い論文数が増えている可能性もあり、数だけで判断できるものでもない。

<学術情報流通検討小委員会からの提案>

・購読型ジャーナルのシェアは依然大きいので、出版社との交渉協議など継続して注力し、一方で学内の購読体制の整備に努める必要がある。

・OA ジャーナルの伸びは急激であるので、APC の検討など注意を払う必要がある。

・定期的に調査を行い、状況把握に努めるべきである。

小規模大学図書館における APC 把握の事例

樋口秀樹(旭川医科大学図書館)

論文の掲載料、別刷料は学会の参加費などと同様に役務となり、財務・会計課など図書館でない部署が支払いの担当となっていることが多い。APC はどちらか? 担当者が資料費と判断すれば図書館が担当するが、役務と判断されると財務・会計部門となる。

前職の電気通信大学の場合、大半のデータは図書館に集まっていたが、財務部門と協力して財務会計システムから APC をカウントした。小規模な大学では財務会計システムが一元化されていることから、「掲載料」、「論文誌」、

「別刷」といった文字列を検索することで、およその APC を把握できると考えられる。

旭川医科大学の取り組みはもう一步進んでいて、2013 年から掲載費や論文の別刷料の支払は全部図書館であります、と学内に宣言することで、図書館に論文投稿に関する情報を集中させるようにした。この取り組みは事務改善にもつながったということで、事務局長から表彰状もいただいた。

旭川医科大学の 2013 年度の実績は 102 件。国内・海外の掲載料は 55 件に対して、APC は 6 件。APC の金額は 111 万 5 千円。なお、掲載料の中には別刷料も含む場合があり、複雑なため分けてはいない。また、請求書に出版社名など書いてあれば良いのだが、PayPal など決済会社名となっているケースもあった。さらに、ハイブリッドジャーナルに OA 論文として掲載されている可能性もあるため、これらのチェックを全論文について行ったことから、思いのほか手間取り、調査には丸 2 日を要した。

図書館に APC の情報が集まってなくても、公費で支払った分については必ず学内のどこかに情報がある。それを集めるためには、関連部署から会計データをうまく集めれば、精度はともかく把握はできる。ただし、掲載料が無料の論文誌や私費で払ったものは把握できないので、別の方法を検討する必要がある。



JAEA 図書館における投稿料の助成と 発表情報の一元管理の事例

早川美彩(日本原子力研究開発機構)

日本原子力研究開発機構(以下、JAEA)図書館では、機構職員の成果情報を一元的に管理し、投稿料等の助成業務を行っている。JAEA の就業規程には、機構職員が発表を行う場合は、学術誌の発表も含めて、発表前に機構の許可を受けなければならない、と定められている。

研究者は、図書館で開発運用している「研究開発成果管理システム」に、成果の発表前、発表後に情報を登録している。登録された情報は、成果発表の許可決裁、成果情報の発信、助成に係る手続き、の 3 つに使用される。助成には情報の登録が条件となるので、かなりの率で研究者の投稿発表状況を把握することが可能となる。

助成は、若手研究者の育成、研究部署間の発表機会



の均等化等を目的として行っており、図書館部門が予算を確保し、執行・管理している。平成26年4、5月の支払状況だが、論文1本あたりの投稿料の平均額で、国内誌58,000円、国外誌94,000円。別刷料を分けることができないので含まれた額となっている。APCの支払についてピックアップすると日本原子力学会のハイブリッドジャーナル(\$2,950)がある。その他、IEEE、PLOSなど、先ほどの平均額と比べるとかなり高額である。

図書館に予算を集約していることで、研究グループの予算の規模に関わらず発表が行える、というメリットがある。また、事務手続きを図書館が一括して行うことで事務効率化にもなる。支払が必ず図書館を通るので情報を収集しやすく、どういったジャーナルに投稿されているのか把握して購読誌の選定に活用もできる。

課題としては費用の確保がある。APCまで想定した予算確保になっていないので、図書館予算でこのまま賄っていくには限界がある。ハイブリッドジャーナルのAPCは助成の対象外であると規則で明記しており、特に希望する場合には個別に協議して対応することにしている。

図書館が担当することで、研究者とのやり取りも増え、研究者との距離も近くなつた。研究者もAPCなどの疑問を図書館に聞きやすくなっていると考えている。

APCをめぐる国際動向

三根慎二(三重大学人文学部)

<イギリスにおける背景>

イギリスでは、どのようにオープンアクセス(以下、OA)を実現するか(APC型のOAかGreen OAか)を巡り、外から見るとGAME、戦い、駆け引きといった様相を呈している。フィンチレポートをきっかけとしてAPC型の公表を政府側が支持する一方で、BIS(ビジネス・イノベーション・職業技能省)はフィンチレポートを見直すべきだという意見を示している。RCUK、WellcomeTrustなどイギリスの大規模な研究助成機関がフィンチに準拠してOA方針を策定して実施している一方で、HEFCE(高等教育助成会議)が担当する研究評価枠組みREF(Research Excellence Framework)では、2020年に研究評価対象の成果はOAジャーナルではなく機関リポジトリで登録しなくてはいけない、としている。将来展望は見えない。

<APCの動向>

Björkの論文では、APCの価格を調べたところ、2つのピークがある。\$601-800と\$1,601-1,800、\$2,000あたりが多い。しかし、APCの価格は調査によって全く違うし、分野によって差がある。

ハイブリッドジャーナルについては、課金方式が多様化てきて出版社によって異なる。予約購読と組み合わせるバンドル方式といったAPCを免除・割引する仕組みも出てきており、マックスプランク研究所などで導入されている。しかし、この方式は失敗した、という認識になりつつあるのではないか。Scopus収録論文のうち、ハイブリッドジャーナルのOA論文は0.5%に過ぎない。ハイブリッドジャーナルには二重取り問題(Double Dipping)もある。支払ったAPC分を下げるのだと言われているが、実際にそういうことが起つたのか疑わしい。

<出版社の動向>

出版社はAPCによる論文を投稿してもらうために、いくつかのサービスを用意している。APCの会員割引のように、大学が契約することでAPCを割引することをやっている出版社もある。

<研究者の動向>

分野や国により研究者の発表経験の割合は異なるが、2009年から2011年あたりになって数値が高くなっていると考えられる。OAメガジャーナルや大手の商業出版社がOAに関するサービスを提供してきたからではないか。

投稿要因について、SPARC Japanの調査とWileyが全世界の著者に対して行った調査を比較すると、どちらも著者はOAだからOAジャーナルに投稿しているわけではなく、分野における評価、論文と雑誌の内容の合致、Impact Factorを重視している結果となっている。

<研究助成機関>

RCUKは2013年4月以降、ブロックグラントを大学に付与して、APCへの支払を支援している。5年間で£1億を想定し、5年後に助成した研究成果の75%をGold、25%をGreenでOAにすることを目標とする。APC助成額は1年目£1,700万、2年目2,000万、3年目は結果を受けて協議して決めるとしている。

WellcomeTrustは査読制学術雑誌論文に加え学術図書・図書の章も助成対象にしている。機関リポジトリではなく、PMC等で出版後6か月以内に無料公開することが決められている。フィンチレポートを受けてセルフアーカイビングよりもOAジャーナルを推奨し、Open Access Awards(APC助成金)を英国の32大学に提供している。

<大学>

イギリスでの政策的な動きに対してJiscを中心に組織的にAPCの取り組みが行われている。Jisc APCプロジェクト

クトがつい 7 月まで行われていた。大学、研究助成機関、出版社が協力して APC の支払システムを構築する実証実験である。また、後継プロジェクトとして Jisc monitor プロジェクトが行われており、REF2020 の OA 方針に対応するために、学内の研究成果の捕捉、OA 方針の遵守、費用を把握するためのインフラづくりや、メタデータの標準作りなどが実施されている。

イギリスでは、2013 年に急激に APC による論文数も APC の総額も増えている。RCUK、WellcomeTrust の影響があるだろう。出版社別の支払額を見ると、Elsevier、Wiley、PLOS、OUP、Springer など大手が目立つ。トップの 2 つに 1 年間で約 £ 100 万支払われている。APC の平均額については、出版社別に毎年 £ 1,500-2,250 のあたりで推移している。

WellcomeTrust がどれだけ APC を払っているかを見ると、Full OA ジャーナルが 559 本、ハイブリッドジャーナルが 1,569 本で、APC の平均額はそれぞれ約 21 万円、34 万円となる。APC 支払総額が Elsevier、Wiley がトップ 2 なのは、先ほどの結果とも同じ。

RCUK からブロックグラントがもらえるのは 107 大学、有名どころの大学がトップを占める。上位 30 大学で全体額の約 8 割を占めている。

イギリスの大学は APC 支払において組織的にワークフローを作ろうという動きがある。各大学の APC の支払において誰が何をするのかを明確にしたフローが確立する段階にまで至っている。金額も処理量も相当なもので、アドホックでやっているわけにはいかないという事情がある。

COPE についてはアメリカでの動きだが、研究機関が APC の助成制度を提供することを定めた協定で、COPE に参加する大学図書館が増えることで、永続的に APC 助成制度が確立することを狙ったものである。大学が環境整備することで、OA ジャーナルと予約購読型雑誌同じ土俵にもっていこうと狙っている。ハーバード大学では、HOPE という形でこの協定を具体化している。対象としては DOAJ に入っている雑誌、OASPA に入っている出版社で、助成額を一人あたり年 \$3,000 までとするなど制限をかけている。

<APC 助成のシナリオ>

この 3 月に出された Björk らによる WellcomeTrust の報告書に基づいて、研究助成機関が APC に助成するときに、どういったシナリオが取れるのかを紹介する。

1. APC の償還型

APC を助成したときは、全額支払うものとする。お金はそのまま出版社に行く。ハイブリッドジャーナルに対しては、APC を支払った機関が支払った分だけ、予約購読料からの削減が保証される。

2. 多段階キャップ型

雑誌の質を測って、APC の支払にキャップを設けようとする。Scopus に収録される Full OA ジャーナルに対して、SNIP(Scopus の学術雑誌の指標)を使って、その数値の高さに基づき 3 段階に分類し、プライスキャップ (\$1,000、2,000、3,000) を設けてはどうかと提案している。実際に SNIP の値で分類したジャーナルの APC の平均を見てみると、ほとんどが \$2,000 以下で賄えると推測される。

3. 分担負担型

研究助成機関は、APC の費用を固定割合で助成するが、残りは大学や著者がお金を払うとするもの。

<報告書の結論>

APC の市場については、革新性を維持しつつ、価格競争を保証すべきであろう。無条件に APC を全額保証すると、研究者はどんどんお金を使い、価格競争力は低下し、出版社が価格を釣り上げる。

出版社によっては予約購読費と APC をバンドリングする可能性があるが、こうなると APC がどうやって計算されるのか、わからなくなってしまい、APC のビッグディールのようなことが起きる可能性がある。

ハイブリッドジャーナルにおいて、APC の予約購読費の減額が本当にできるのか。ビッグディールが主流の現状では、非開示条項で各大学がどれだけお金を払っているかわからないし、減額をもたらすことは難しい。多く論文を出している研究大学の支払額が増えて、出してない大学がフリーライダーになってしまう問題もある。

<まとめ>

日本においてはイギリスのように APC は喫緊の課題ではないが、アンケート調査、論文調査が示すように、研究者間に APC を伴う OA ジャーナルに投稿することが普及しつつあることは明白である。今後 APC に対応するには国際的な動向把握をして、各研究機関がどのような取り組みをしているのかおさえておく必要がある。国内外で APC の支払の情報も共有すべきだろう。イギリスの大学のデータが公開されていることは素晴らしい。こういうことにより APC の透明性、競争性が確保される。また仲介者が必要となるが、日本では JUSTICE…?



パネルディスカッション

進行:金藤伴成(東京大学附属図書館)

パネリスト:井上敏宏(京都大学附属図書館)／樋口秀樹(旭川医科大学図書館)／早川美彩(日本原子力研究開発機構)／三根慎二(三重大学人文学部)



4つの論点に沿って、進行役の金藤氏から質問が投げかけられる形で議論が進められた。

1. 日本の研究者と Gold OA/APC

研究者が OA であることを理由に OA ジャーナルを選んでいない点について、井上氏から、発表することで何が得られるのかという点を考えれば OA である必然はないとの発言があった。三根氏から、雑誌を品質や分野を理由に選ぶことは世界的にも共通で、別の調査では OA メガジャーナルを選んだ理由に、査読が速く、研究成果を速くほしいという回答もあり、悪徳的な出版社と知らずに投稿してしまうこともあるのだろうとの発言があった。

同じ分野の中でも違いは出てくるのかという質問については、樋口氏から工学分野について言及があり、ネットワークやスペコンの研究者は論文発表そのものよりも国際会議での口頭発表を重視するケースもあることが指摘され、早川氏から、JAEA でも論文が盛んなところもあれば、技術レポートとして出すのがメジャーなところもあることが紹介された。

2. 大学/研究機関の Gold OA 論文件数、APC の支払額を把握するには

大学の中で OA の件数を把握する事例として九州大学からコメントがあり、東京工業大学の砂押氏から九州大学の方に代わり説明があった。九州大学では電子ジャーナルの選定などの参考のために Scopus のデータを購入したが、これを基に九大研究者の論文数のデータを把握しており、今回 SPARC Japan の調査で例示された APC による OA ジャーナル 857 タイトルをマッチングして、OA ジャーナルの論文数を算出した。世界全体および国内の論文数の傾向と比較するとともに、部局ごとの OA 論文数の推移などについて紹介があった。

APC の把握については、井上氏から、大規模大学だと全体の動きが一つになってないこともあります、学部により支払方法も違い把握は難しいとの見解が示された。樋口氏から、旭川医大のケースとして、提出された著者最終原稿をもとに雑誌名やそれが OA ジャーナルか、あるいはハイブ

リッドジャーナルとして公開されているのかといったことを調べるのに非常に労力がかかった旨報告があった。三根氏から、海外の状況として、OA 関連のデータベースやファンディングの条件など整備が進んでいるので、日本と比べると(労力は大変らしいが)把握しやすいのではないかと発言があった。

3. 誰が APC に関与するのか(ステークホルダーについて)

URA(ユニバーシティリサーチアドミニストレータ)について、樋口氏から、URA は論文数における TOP10% 論文数の割合や国際共著率が高くなるように投稿先や共同研究の相手方を選ぶことになると思われる所以、URA と図書館が連携して OA 誌への投稿を推進する必要があるとの指摘があった。

JAEA における助成について、早川氏から、科研費などの外部資金による支払については図書館はあくまで書類の確認だけで、支出は外部資金から執行するので、外部資金担当部署もかかわることになるとの説明があった。

4. 機関負担/関与のモデルと財源

APC の価格に関連して、樋口氏からネットのサービスの価格設定について 2 つの事例の紹介があった。

・電子証明書(SSL のサーバに使うもの)。用途に応じて 3 種類あり、値段も 20 万から数千円までと差がある。これは審査に要するコストの差であり、証明書そのものの信頼性の違いである。OA ジャーナルも信頼性が高ければ査読コストで値段が高くても使うだろうし、信頼性が低いのに値段が高いのはやっぱりおかしいというように価格競争がうまく働くとよい。

・radiko.jp。もともと無料だったものを、配信エリアを超えて聴取する場合に有料化した例。無料だったものでも付加価値があれば、有料で支えられるという例。

三根氏から講演での 3 つのシナリオについて補足があり、報告書では大学図書館が APC にかかるときには相当に注意しないと電子ジャーナルの購読費のように出版社にうまくやられてしまい、お金をどんどん取られる可能性が高いというニュアンスで書かれているとの説明があった。また、雑誌の信頼性、質を測る指標を持つことが図書館コミュニティの腕の見せどころであるとも発言があった。

フロアから研究者のコスト意識に関する発言があり、電子ジャーナルについて利用者(研究者)と支払者(図書館)が乖離したためにコストが増大したのと APC が同じ事態になるなら、いっそ APC を研究者任せにして、お金がないなら出さない、もしくはお金を出せるところを選ばせる、としてはどうか、との投げかけがあった。各パネリストからは、雑誌をやめていく体制づくりを進める傾向にある大学の現状では APC は研究者に任せたほうが適正に落ち着くの

では、といった意見や、機関として教員にお金を出すと自分の財布でないので掲載論文にカラーページを追加して無駄遣いしがちであるとの意見があつた一方で、機関として雑誌購読費と APC を論文に係る総額として把握する必要はあるといった意見も提示された。

最後に金藤氏から、“各機関の APC に対する当面の向き合い方”について提案があつた。

国際的な動向把握、政府の政策、研究助成機関のポリシーの情報収集をした上で、

- APC の支払額の把握
- 学内外のステークホルダーとの対話
- APC の機関モデルの登場に備えて、大学としての Gold OA を含む OA ポリシー策定
- の 3 点を考え、APC に対する制度設計・財源計画を立てていってはどうかという提案をもつて、パネルディスカッションを終了した。

-----**参加者から**-----

(大学/図書館関係)

・旭川医大の事例は調査するなら何となくこんな方法だろうと予想はしていたものの、改めて説明していただいて参考になった。JAEA の事例はこんなスマートな処理をやっている機関があるのかと驚いた。APC については、まず小規模な機関、分野が特化されている機関が着手しやすいだろうと感じている。しかしながら最後の議論にもあったように、本当に図書館が今手を出すべきか、自分の中でも結論を出し難い。

・APC に関する情報収集、教員との連携についてヒントを頂いた。

・今回は盛りだくさんでしたがフロアの反応から APC に対してはまだまだ問題の共有が必要と感じました。

・予約購読型の(ハイブリッド誌)の雑誌購読料が減額されるなら、APC 支払額をサンプル調査するだけの価値はあるのかな、と思いました。(そういうメリットが無いとなかなかできない状況なので)

(学協会/研究者)

・詳細な調査結果を見せていただき今後の検討に役立つと思う。

(学協会/学術誌編集関係)

・APC を今後採用するときの考え方の参考になる。投稿が大学からが多いので、大学の考え方方が参考になる。

(企業／図書館関係)

・冊子体雑誌→電子ジャーナルへの移行に加え、価格高騰もあり、OA という新しい流れが発生してきた。図書館現場の雑誌担当者は業務量が減少している。新たにやれる業務は APC の管理、研究業績の管理ではないかと考えている。

(大学/大学・教育関係)

・APC に関する現状、課題が明確になり勉強になりました。

・Institutional Research と OA with APC 、OA without APC 組み合わせて議論すると面白うだと思って拝聴しました。

-----**企画後記**-----

😊 九州大学からスライドを提供いただきましたこと、感謝いたします。

SPARC Japan の調査結果から大学図書館の APC への当事者感が薄いことは感じていただけに、今回のテーマが成立するのか心配しましたが、参加者の方から前向きに受け止めていただいた意見が多いようではほつしております。

砂押久雄（東京工業大学附属図書館）

😊 暑い中、多くの方にお越しいただきありがとうございました。日本ではまだ APC に対する組織的な対応が進んでいませんが、今回のセミナーが様々な立場の人々の間で問題を共有するための一歩となれば幸いです。

金藤伴成（東京大学附属図書館）

😊 日本では英国のような APC への対応が迫られているわけではないですが、今後も動向を把握しておくことが必要だと思われます。

三根慎二（三重大学人文学部）



■ 第2回 SPARC Japan セミナー 2014 「大学におけるOAポリシー：日本版OAポリシーのモデル構築に向けて」 2014年9月26日(金) 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者:82名

国や助成機関、大学等におけるオープンアクセス(以下、OA)ポリシーの策定が増加を続けています(2014年7月現在、ROARMAPにおける登録数は350超)。各ポリシーやその対象は多様ですが、研究成果のOA化を推進する上で重要な役割を果たしています。日本でも、政策レベルでのOA議論は高まりつつあり、博士論文のインターネット公表義務化や科学技術振興機構によるOA推進の方針等、国や助成機関によるOAポリシー策定が進みつつあります。一方で、大学では機関リポジトリ自体は増加しているが、紀要以外の学術論文がなかなか増えない、OAに対する研究者の理解が深まらない等の課題を抱えており、大学全体としてどのように取り組んでいくのかが問われています。

このような状況の中で、第2回 SPARCJapanセミナーは、国内外におけるポリシー策定の先行事例やOAの現況を参照しながら、今後日本のOAを推進していく上で大学におけるOAポリシー策定が持つ意義・効果について議論し、今後のあり方を検討していくことを目的に開催されました。

セミナー概要是以下のとおりです。当日の配布資料等含め詳細は SPARC Japan の web サイトをご覧ください。
(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20140926.html>)

講演

オープンアクセス方針の現状 三根 慎二(三重大学人文学部)

学術情報流通は、これまで研究者、大学・図書館、学会・出版社から構成される閉じた流通だったが、OAになると、政府、研究助成機関、一般市民・納税者も構成要素となる。OAポリシーは、これらの利害関係者を考慮して策定される必要がある。欧米では助成機関のOAポリシーが増えていて、出版社も7割強がセルフアーカイブを認めている。大学としてのOAポリシーは、10年以上前から先駆的大学がでており、2大方式として、評価と結びついたリエージュ式方針とデフォルト公開とするハーバード式方針があるが、大学の文化や体制により様々である。

データからOAポリシーを義務化とする大学と、そうでない大学は、リポジトリに登録されている論文の割合は全く



違うことがわかる。義務化で平均6割という結果もある。ただし、義務化しても全て登録されるわけではなく、方針をたてて推奨しただけでは効果は限定的という認識が必要である。

国内では、文部科学省(博論公開義務化)、助成機関としてJST、大学としては、岡山大学、北海道大学、北陸先端科学技術大学院大学、名古屋工業大学がOAポリシーを策定している。今後、方針施行に伴う困難を、経験を共有することによって解決し、方針の評価や策定に必要な知識を蓄積する必要がある。また、方針策定後にもすべきことは多くある。OAポリシーの策定はOAの可能性をひらくにすぎないが、非常に大きな可能性を持っているといえる。

How scholarly communication goals affect the design of open access policies

Stuart M. Shieber(Harvard University)

研究者の目的は、社会へ研究成果を還元することであり、そのために学術情報流通は学術研究において重要な役割をもつといえる。今回は、先ず、原理原則から学術情報流通の目標について精査し、それから、その目標にそってOAポリシーを設計するために、どのような処方箋が必要となるか話したい。

学術情報の流通システムにおいて、もっとも重要なことは、財政的に健全で継続可能であること、次に重要なのは、オープンさであり、可能な限り幅広く公開されているこ

と、3つめは、著者が自由に様々な方法で研究成果を利用できること、4つめとして、以上の条件を満たしながらコストを抑える効率性が挙げられる。

学術情報流通の基盤となる学術雑誌においては、現在、Toll-access journal（購読している読者にアクセスを限定する学術雑誌）と Open-access journal（著者等がAPC=論文処理費用を支払い、オンライン上で無料公開される学術雑誌）が存在するが、それらを先に挙げた4つの観点から比較検討したい。

先ず、継続可能性については査読、原稿の編集、出版、インフラ等にかかるコストの回収が必要である。短期・長期で黒字でなければ継続可能とはいえない。購読型ジャーナルと OA ジャーナルを比較してみると、短期的には両方がコストを回収し、利益を上げている。しかし、購読型ジャーナルは、何十年もハイパーインフレ状態であり、長期的には継続可能とはいえないだろう。

オープンさという点でも、購読型ジャーナルは研究目的の再利用ですら制限されるケースがある。著者の自由という点でも同様に、著者自身が論文を配布する権利が制限されてしまう。効率性についても、統計データを比較すると1ページあたりの価格、1引用あたりの価格は、購読型ジャーナルを中心とする商業出版社で非常に高くなっている、論文あたりの平均収益も、購読型ジャーナルは OA ジャーナルに比べ割高である。以上のことから、OA ジャーナルの方が全ての観点で望ましく、OA ポリシー策定も OA ジャーナルへの移行を促進するような方針が好ましい。

移行のためには、1. 望ましいアクセスより低いアクセスとなっている現象を緩和し、2. 購読ベースから OA へ移行を支援することが必要であり、1. が2の妨げにならないようにしなければならない。

現象を緩和する方法として、ハーバードの OA ポリシーを紹介したい。

ハーバード大学のポリシーは、3つの構成要素からなる。

1. 著者は大学へ学術論文を配布する非排他的な譲渡可能な許可を与える。

2. 著者へ譲渡して権利を戻すことを可能とし、著者の裁量で適用免除とすることも可能とする。

3. 大学が得た許可を利用可能とする。

これによってデフォルトの状況が変わる。以前は、著者はオプトインにより権利を保留していたが、オプトアウトしない限り権利は保留されることになる。ハーバード大学は2008年 Arts & Science 学部から、このようなポリシーを導入し、現在1万9千件のコンテンツが登録されて、ほとんど全てが OA となっている。登録は着実に伸びているし、ダウンロードも400万件程度高い需要がある。

次に、購読型ジャーナルから OA ジャーナルへの移行



を促進するポリシーを紹介する。このようなポリシーを策定するためには、出版社が購読型ジャーナルから OA ジャーナルへ移行できる環境を整えることと、機関が研究成果公開のための資金提供に責任を持つことが重要である。理工医学分野では、政府・私設の助成機関が資金の扱い手となり、人文・社会科学では大学が資金の扱い手となる。

では、助成機関や大学はどのようなポリシーを持つべきか考察する。先に挙げた目標にそって考えるならば、短期的には OA への移行を促すよう、そして長期的には OA マーケットの望ましい向上に資するような資金の提供が重要である。これは、研究成果の OA が保証されるような出版を支援し、OA ジャーナルへの移行を支援するため、持続的で妥当な出版料金に対して、資金提供する必要があるということである。先に述べたように、人文・社会科学分野では、大学が主要な研究資金提供者であるため、大学自身がこのようなポリシーをもつことが必要となる。ハーバード大学は COPE (Compact for Open-Access Publishing Equity) という協定を基に、OA ジャーナルへの出版料を支払うためのファンドを運用している。また、複数の大学が COPE に署名し、それぞれの大学が同様のファンドを設立している。助成団体もこのようなポリシーをもつことが重要だが、最適なポリシーをだすことは難しい。日本でそれが実現することを望む。

以上、まとめると、グリーンセルフアーカイブをすすめる OA ポリシーを打ち出すこと、OA ジャーナルを推進するための費用を支払うべきであること、そして購読型ジャーナルやハイブリッドジャーナルに資金提供し、移行を遅らせる支援はしてはいけないというのが私の主張となる。

リエージュ大学から学ぶ OA ポリシー策定方針 林 和宏(名古屋工業大学附属図書館/DRF)

名古屋工業大学では 2012 年より、研究論文について原則、リポジトリに登録するという方針を設けて運用をして

いる。制度を検討・運用する際、リエージュ大学の制度から多く学ぶことがあったため、リエージュ大学の OA ポリシーについて、本学の状況とも比較しながら、調査したことを報告したい。

リエージュ大学の OA ポリシーは、リエージュモデルとも言われ、グリーン OA の理想的なかたちとして知られている。リエージュ大学の OA ポリシーで最も特徴的な点は、リポジトリに登録された研究成果のみを学内評価、広報、補助金申請などの対象とすることである。また、制度運用にあたっては、研究者が自ら登録を行うことが原則となっており、出版社の権利確認についても研究者が行うこととなっている。これは、研究者自身が OA を理解し、自ら OA を進めていく状況に発展させるためである。

義務が研究者に課されている一方で、登録におけるワークフローはユーザビリティを考慮して設計されており、登録された情報を有効に活用してもらうためのツールも充実している。また、アドボカシーも盛んに行っており、学長もブログで OA を呼びかけている。

本学の制度と比較して考えた場合、次の点が本学の課題として考えられる。リポジトリ自体を評価の対象としたリエージュ大学と比べ、本学では、評価と関係が深い研究者データベースの論文情報に入力された論文を原則リポジトリ登録することとしている。これは、研究者による論文情報の入力を待ち、それから図書館が登録作業を行うワークフローとなるため、論文発

表からリポジトリ公開まで
タイムラグが生じること、研
究者の OA 意識が希薄に
なるという問題がある。今
後、このような問題に対応
していく必要がある。



JAIST学術研究成果リポジトリにおける論文公開の取り組み

寺田 美樹(北陸先端科学技術大学院大学附属図書館)

北陸先端科学技術大学院大学は、義務化ではないが、収集方法の見直しにより、リポジトリにおける論文公開を強化してきた。本学では、2007 年度にリポジトリを公開し、現在 8,229 件のアイテムを公開している。今日は、このうち約 2 割を占める学術雑誌論文について話したい。

当初、研究者から登録依頼受付を行っていたが、登録数は多くなかった。そこで、2008 年度に論文の収集方針を定めた。方針は、業績データベースに登録されている論文は、教員からの申し出がない限り、リポジトリ登録を認めるものとし、論文のリポジトリ登録を行うというもので、全学

的な承認を得て、実施された。業績データベースの論文情報をベースとしたのは、研究者のほぼ全員が入力しており、約 8 割の教員が定期的に論文情報を更新しているためである。また、登録作業を効率的に行うため、登録対象の論文を出版社ポリシーや図書館での購読状況により分類した。これにより、以前に比べ 4 倍近い論文が登録可能となった。コンテンツの他にも、収集方針・方法、スケジュール、全学的な推進体制の確立や、出版社への問い合わせ実績蓄積、論文登録した教員の増加、等の成果が得られた。

一方で、本文の収集はメールで対応し、業務的な手間も多く、まだ回収率も低かった。これを解決するため、2010 年に業績データベースへ、入力必須のリポジトリ関連項目と本文アップロード機能を追加し、出版社名から出版社ポリシーも自動表示として、効率化を図った。

収集方針のメリットとしては、過去の論文を収集するのに効果があること、方針により教員へコンタクトがとりやすいことがあげられる。ただし、公開までの業務は変わらないため、業務を効率的に行い、教員の本文提出を容易にするしくみをつくる必要がある。本学では、論文公開の手順が確立されており、順調に登録も増えている。

<機関 OA ポリシーへの出版社対応について> エルゼビアにおけるオープンアクセスの進展: 最新情報

Anders Karlsson(エルゼビア グローバル・アカデミック・リレーションズ)

今日は、一般的な OA の進展状況を踏まえてから、エルゼビアにおける OA の状況、そしてリポジトリへの対応と話をすすめたい。エルゼビアでは OA のコンテンツが前年より約 20% 増加している。現在、117 誌の OA ジャーナルを公開しており、ほぼ全ての雑誌がハイブリッドとなっていて、グリーン OA もほぼ全ての雑誌が対応している。

エルゼビアは、学術の自由(著者が公開方法を自由に選択できること)、事務的な負担軽減、重複するようなインフラを作らない、という 3 つの原則を掲げている。そして、リポジトリに関係して、メタデータの提供、埋め込まれた全文の提供、エンバーゴ期間



終了後の自動公開、以上の3つのプロジェクトをパイロット版として実施している。

グリーン OA は無料でない。実際は図書館の購読料で賄われている。エンバーゴの期間もある。私たちは OA の出版社であり、様々な選択肢を提供している。今後もコミュニティとともに、研究者の選択肢の自由を最大限、負担を最小限にするソリューションを提供していきたい。

Macmillan Science and Education (MSE) – an Open Research Publisher

Antoine E. Bocquet (NPG ネイチャー アジア・パシフィック)

先ず、NPG が OA を重要視している理由を説明する。それは、より多くのオープンリサーチの選択肢を通じて、より質の高い刊行物を提供するためである。OA として刊行することによって、学術情報の流通が透明化し、より活用しやすく、即時性があるものになる。それにより共同研究も加速し、社会へのインパクトも大きくなる。これは、研究者コミュニティの発展に寄与し、社会へ研究の意義を伝えるという、Nature の創刊当時のミッションステートメントにも通じる考え方である。

ここで NPG はハイブリッドジャーナルであった Nature Communications を完全な OA ジャーナルとすることを発表したい。これまで NPG は、2005 年に 6 か月のエンバーゴでリポジトリ公開を認める方針を定める等、多くの OA ポリシーを打ち出している。2011 年には、PLOS ONE をモデルとした OA ジャーナルである Scientific Reports を刊行している。また、様々な学協会や大学等が質の高い OA ジャーナルを刊行できるようにするために、今年 Nature Partner Journals というプログラムを開始している。OA ジャーナルへの期待とニーズが加速する中、ハイブリッドジャーナル

のビジネスモデルには多くの課題がある。今後も最高レベルの編集水準とサービスを提供しつづけるため、持続可能な OA 刊行物の発行に取り組んでいきたい。



Shieber (Harvard University)／林 和宏（名古屋工業大学附属図書館/DRF）／寺田 美樹（北陸先端科学技術大学院大学附属図書館）／Anders Karlsson（エルゼビアグローバル・アカデミック・リレーションズ）／Antoine E. Bocquet (NPG ネイチャー アジア・パシフィック)



4 年前にも OA ポリシーをテーマにしたシンポジウムが、同じく Shieber 氏を迎えて開催されている。このため、4 年間に起きた OA をめぐる変化について話し合うことからディスカッションは始まった。Shieber 氏は、この 4 年間であつた最もうれしい変化は、出版社が OA ジャーナルを重要なビジネスモデルと考え始め、OA ジャーナルへ移行しつつあると述べたが、一方で、まだまだ OA へ移行していない雑誌は多く、いつ 100% OA ジャーナルへ移行するのかと出版社側のパネラーへと質問した。

出版社側のパネラーからは、次のような回答があった。査読により高い割合で、投稿論文が却下されており、質の維持のため価格も高くなっている。OA とする場合、却下される論文の査読の費用も採用された著者が賄うことになるが、このような状況を考えると、高額な APC を著者へ請求することはできない。ただし、ゴールド OA への補助があれば、移行を進めることも可能である。

ゴールド OA の話題となり、Shieber 氏から続いて次の意見があった。助成機関や大学は OA にかかる費用を出すべきだが、フィンチレポートで推奨されたことは、持続可能とは思えない。購読型ジャーナルを残すインセンティブを与えてしまう。ハーバードでは、ハイブリッドジャーナルを含めずに、学内予算を使った研究に限定して、OA ジャーナルへの投稿費用を支援している。もし、このやり方を、予算を限定せずに、全ての機関が採用すれば、毎年刊行される論文の 40% がカバーできる。

これに対し、Karlsson 氏から、現在は購読型、ハイブリッド、純粋な OA ジャーナルが共存する状態が続いているが、もし、ハイブリッドがなくなってしまうと、著者は論文公表の方法が制限されてしまうことになると意見があった。また、Bocquet 氏は、出版社としては質の良いジャーナルにコストをかけて、良い結果が得られるのならば投資すると述べて、今後、研究者の論文発表がコモディティ化した場合、出版社は良い論文を発見する方法を提供するソリューションプロバイダーとなるかもしれないという可能性について

パネルディスカッション

＜大学におけるオープンアクセスポリシーの策定は機関リポジトリを活性化するか？＞

モデレーター：西薗 由依（鹿児島大学附属図書館/DRF）

パネリスト：三根 慎二（三重大学人文学部）／Stuart M.

話した。

ここで一旦話題を戻し、現在様々なジャーナルの存在するなかで、リポジトリが果たす役割について検討し、OAポリシーの効果について意見を述べ合うことになった。モデレーター西薗氏から、日本ではリポジトリ登録コンテンツで雑誌掲載論文の割合が少ないが、OAポリシーを策定した大学では、雑誌掲載論文の割合は大きいため、OAポリシーの効果について質問があった。林氏から、効果はやはり大きく、研究者はOAを望んでいるが、手続きや公開までの作業が煩雑、著作権の不安から雑誌掲載論文の登録が進まなかっただけで、制度によって手続きが整理され、簡単になったことにより大幅に登録が推進されたと意見があつた。

最後に、三根先生より、Shieber氏へグリーンOAのみで

-----**参加者から**-----

(大学/図書館関係)

- ・「OA推進」という大きな枠組みの中で、Green OAとGold OAについて再度整理をし、なぜGreen OAを推進するのか戦略や考え方を捉え直す必要があると感じました。とても有意義でした。

- ・機関リポジトリを立ち上げる予定なのでポリシーの大切さがよくわかつて参考になった。

- ・OAポリシーの話題とはずれるが、出版社のOAに対する姿勢について話が聞けたことが良かった。OAポリシーに関しては、イギリスの例もあるように、日本がどの路線を行くのかの検討が、出版社の事情を聞く前にあるべきなのかとも思いました。

- ・Green OAについての話をもっと聞きたかった。先行事

-----**企画後記**-----

😊 今回のセミナーを企画して感じたことは、OAポリシーとその運用を考えようすると、必然と学術情報流通全体の在り方を考えなければいけないということでした。学術情報流通をよりよい方向にもっていくため、大学や図書館に何ができるか？OAポリシーはその鍵になるのかと思ひます。至らないところもあったかと思いますが、ご来場いただいた皆様、ありがとうございます。

林 和宏（名古屋工業大学附属図書館/DRF）

😊 登壇いただいた方それぞれの知見から多くを学ぶことができ、OAポリシーを軸に、URAとしてすべきことも見えてきたような気がします。これからいろいろやっていきます。司会としては最初の5分の概要説明で力を込めすぎて、その後の時間管理が至らず、最後のディスカッション

は不十分という認識であるかと質問があった。Shieber氏は、グリーンOAだけでもかなりすすめば、OAジャーナル移行に影響があるが、それだけに頼るのは心もとなく、ゴールドOAへの移行を支援する制度が必要であると意見があつた。また、三根先生よりグリーンOAは出版社にとってプレッシャーになるかと、出版社側のパネラーへ質問があつた。出版社側からは、機関によるグリーンOAをサポートするのは難しく、助成機関と共に対応するほうがやり易いと回答があつた。

以上、パネルディスカッションは、大学によるOAポリシー策定にあたって、ゴールドOAの進展する状況や助成機関のOAポリシーの動向を注視しながら、現状のOA推進に寄与することの重要性を確認し、終了した。

例について特に参考になった。

(大学/大学・教育関係)

- ・時間の関係かもしれないが、もう少し深いところまで話を聞きたかった。

(その他/図書館関係)

- ・概観から個別の事例、出版社さんの立場も聞くことができ、大変参考になりました。

- ・機関リポジトリを構築中のため世界的なOAの動き、効果とリポジトリの事例紹介、参考になりました。

(その他/研究者)

- ・機関リポジトリと業績DBとオープンアクセスポリシーの関係を考える良い機会になった。

が短くなってしまったことが反省点です。

天野 紘里子（京都大学学術研究支援室）

😊 OAをいかに実効的に進展させていくか、1つの解があるわけではなく、すぐれた先例や知見に学びつつ、それぞれの文化に合った形を模索していくかなくてはならないのだと思います。今回のセミナーがその足がかりの一つになれば幸いです。なお、パネルディスカッションでは、前振りの盛り上がりで予定していた構成が飛んでしまい、グリーンOAポリシーについて多くの時間を割けませんでした。モデレーター力量不足をお詫びします。

西薗 由依（鹿児島大学附属図書館/DRF）



■ 第3回 SPARC Japan セミナー 2014 (オープンアクセス・サミット2014 第1部) 「「オープン世代」の Science」

2014年10月21日(火) 学術総合センター2階 中会議場 参加者:76名

オープンアクセスウィークにあわせ開催された2014年度第3回SPARC Japanセミナーでは、「「オープン世代」のScience」と題し、狭義のオープンアクセスを越え、オープンアクセスを使う「ユーザー」側の活動に焦点をあてた企画を立案いたしました。広がりつつあるオープンアクセスやウェブの発達によって、すでに大学や研究機関という組織にこだわらず、自らの興味に従って研究をする人たちが登場はじめています。いわば趣味で研究する人たちですが、その完成度は一部では職業研究者を凌駕しています。「野生の研究者」とでもいるべき人たちの存在は、既存の学術機関の在り方、存在意義に大きな問題提起をしていると言えるでしょう。

本セミナーでは、既存の研究機関や職業研究者という枠を超えた研究活動、あるいは研究支援活動を実践する5名の方々にご講演をいただき、議論を深めました。研究の在り方が今まさに変わりつつある、その息吹を感じるとともに、今後の研究体制の在り方について、議論が白熱しました。

セミナー概要は以下のとおりです。当日の配布資料含め詳細はSPARC Japanのwebサイトをご覧ください。

(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20141021.html>)

講演

概要説明

土出 郁子(大阪大学附属図書館)

オープンアクセスはこの10年ほど、理念的政策的な面に焦点が当たっているが、その一方で若手の研究者や学生が日常的に接しているWebベースの文化では、オープンなコンテンツ、不特定多数とのやり取り、クラウド環境による資源共有などが当たり前の形で行われるようになってきた。これらの行為は学術研究の世界にも当然のように波及する。伝統的な学術コミュニケーションや学問的枠組みから、学術研究の成果だけでなくプロセスもどんどん外にはみ出していっており、その部分こそがオープンアクセスの理念を現実のものとしているとも言える。

翻って、伝統的な学術コミュニケーションの担い手であった機関(大学)やその図書館、学会は、このみみ出してきた部分に対して何ができるだろうか。答えは、まだない。何が必要なことか自分たちで見極めていかなければならない。本セミナーでは、「何が起きているか」を紹介するのがひとつの目的である。今日の会が皆様にとってもエキサイティングで刺激的なものになることを期待している。



Alternativeな生命探究の場としてのバイオメディアアート

岩崎 秀雄(早稲田大学理工学術院)

「生命(性)とは何か」という問いは、古来より芸術の主題となっている。ダリが1957-58年に発表した作品「Butterfly Landscape」では、当時解明されたばかりのDNAの二重らせん構造がモチーフとして取り入れられている。切り絵作家でもある岩崎氏は、2007年より早稲田大学において、生命美学のプラットフォームである「metaPhorest」¹を立ち上げた。「metaPhorest」に芸術家が長期滞在し、生命にかかわるアートを作成する。「metaPhorest」は生命科学の実験、製作、研究の場でもあり、生命科学者、学生と実験環境、セミナーを共有する。これにより、さまざまな作品が誕生している。

「metaPhorest」において芸術家は単に生命科学の知見や材料を利用するだけではなく、自らの内発的動機に基づき研究を行う。芸術家の視点は、生命科学に新たな光をあてるにこも



¹ metaPhorest <<http://metaphorest.net/>>

つながっている。作品作成のプロセスそのものも芸術作品となる。研究は表現行為の一部として位置づけられる。ラボ(実験室)がアトリエとなり、アトリエがラボとなっているのだ。このことは、科学と芸術が入れ子構造であることを実感させる。自然の一部である人間の営みである芸術は、自然を対象とする科学の一部分であるが、科学は芸術の一部でもある。科学と芸術は相互批判、相互参照しながら対峙しているメビウスの輪なのだ。

芸術と科学の垣根を超えて、芸術家と科学者の区別もを超え、DIY(do it yourself)から DIWO(do it with others)へと広がりつつある生命美学は、まさにオープンアクセスの精神そのものなのだ。

コンテンツとしてオープンに発表される研究活動について - ニコニコ学会βなどを通じて

山田 優幸（明治大学米沢嘉博記念図書館）

論文や研究発表は研究者だけではなく、普通の人にとっても面白いものである。一つの面白いコンテンツとして見る研究や論文について発表したい。

もともと大学図書館員であった山田氏は、雑誌の受入業務中に、世の中には多くの面白い論文があることに気付いた。そこでTwitterとCiNii ArticlesのAPIを用い、Twitterで話題になっているキーワードに関する論文を紹介するサービス「論文ったー」²をリリースした。普通の人には少し縁遠く思える論文でも、話題のテーマに関するものであれば少し身近になる、そこに面白さがある。現在、論文ったーのフォロワーは6,000人以上にのぼり、その多くは研究者ではないと考えられる。論文は普通の人にとっても面白いのである。

また、山田氏はニコニコ動画データの分析・研究を趣味で行い、そこからニコニコ学会βの運営等にも参加している。ニコニコ動画の中でも多くの電子工作やプログラミング等、技術・研究関係の動画が30,000件弱、8,000人以上のユーザーから投稿されている。そこでは技術的な新規性以上に表現や見せ方の工夫が面白がられている。

2007年に第1回が開催されたニコニコ学会βには第一線の研究者による「研究100連発」と、公募型の「研究してみたマッドネス」という二つの発表方法がある。前者は1時間で5人の研究者が自身の行ってきた研究を1人20ずつ、計100個発表する企画である。10～20



² 論文ったー(@ronbuntter)
Twitter <<https://twitter.com/ronbuntter>>

年間の研究成果を数分で紹介するうちに発表者個人の姿も見えてくる、エンタメ性の高いものである。「研究してみたマッドネス」は10～20人が3分程度の発表をし、その中から審査員とニコニコ生放送のアンケートで対象を決める。中にはAKB48の公式イベントに呼ばれたり、海外のイベント等でも使われるようになったりした研究もあるという。

これらの発表者の4割が学生で、他に若干の教員もいるものの、残る半数は研究者以外の社会人、趣味で研究をする人たちである。もともと多くの人々が研究に類する行為をしていたものの、職業研究者以外は可視化されていなかった。それがソーシャルメディアによって可視化された。気軽に研究・発表できる手段ができたことで、今後研究はカジュアルにできるもの、一億総研究者時代が来るのかもしれない。

国内発の国際的総合科学学術誌 Science Postprint, SPARC から始まり SPARC に至り...

竹澤 憲一郎(ゼネラルヘルスケア株式会社)

竹澤氏は生命科学分野で博士号を取得したのち、ベンチャー企業などを経て2007年にゼネラルヘルスケア株式会社を創業した。竹澤氏は同社において、2012年のSPARC Japanセミナーに着想を得て、オープンアクセスジャーナル「Science Postprint」³を創設した。その背景には、アジアには、Nature、Scienceのような学術研究のインフラとなる総合学術雑誌が存在しないという現状がある。

2050年にアジアは世界の学術論文の半数を生産するまでに拡大し、その市場規模は約5000億円に達すると試算されている。しかし、日本においては、学術論文誌は学会が出版すべきものとの固定概念があり、また既存のNatureのような雑誌のブランドが強すぎたため、今までだれも総合学術雑誌を創設しようとは思わなかつたからだといふ。竹澤氏はオープンアクセス誌「Science PostPrint」により、日本、アジアの学術インフラを作ることを目指している。

現在「Science PostPrint」は、資金や人材の不足や、「ビールズリスト」⁴にノミネートされるなど困難にも直面しているが、生命科学論文のデータベースPubMedに収載



³ Science Postprint <<http://www.spp-j.com/>>

⁴ コロラド大学デンバー校の図書館員、Jeffrey Beallが作成しているリスト。オープンアクセスの学術雑誌出版をうたっているが、APC（論文加工料）搾取の疑いの高い出版社のリストとして知られる。

Beall's List <<http://scholarlyoa.com/publishers/>>

され、インパクトファクターを取得することにより、こうした困難を解消したいと考えている。将来的には、出版後査読、顕彰、査読協力金の支払いシステムの導入等を計画しており、目標の実現にむけて精力的に事業を展開しつつある。

「若手アカデミー」というプラットフォーム 駒井 章治(奈良先端科学技術大学院大学)

駒井氏はまず、「研究」をめぐる状況の変化について概観した。研究活動には 3 つの M がキーワードになる。Management、Mentorship、Motivation である。研究者は一様に、興味のある様々なことをしたいのに時間ががないと感じている。研究支援では成果を問う声が厳しくなり、従来研究室で行われていた教育や人財開発(考える楽しさの共有を含む)は、若手の任期制などにより困難になっている。研究者になる様々なルートや機会があつてよいはずだし、研究不正は締め付けばかりしてもなくならない。このような状況にあって、研究者同士のネットワークがますます必要となっている。

駒井氏は 2011 年 11 月の発足時から 2014 年 9 月末まで、日本学術会議内の若手アカデミー委員会⁵ の委員長を務めた。この若手アカデミー委員会は日本国内の若手研究者のネットワークである。世界各国で若手研究者の会が発足し、「Global Young Academy」というネットワークが形成された。この動きを受けたものもあり、GYA の一員としても活動している。国内学協会の若手の会にも参加を呼びかけており、総合学術や学際領域など、単独の学会で取り上げることのできないテーマをとりあげたり、高校生や学生と未来の研究を考えるワークショップを開催したりしている。また、これらの取り組みから得た知見をもとにシニアのアカデミー連合に対してコメントすることもある。

学術研究環境の変革期にあって、世界の状況を知る必要があると駒井氏は考える。若手と従来の研究、研究者とをつなぐインターフェイスをつくることによって、様々な活動を表させ、科学が特別な活動として孤立するものではなく、普通に身近に捉えられる世界を目指したい、という趣旨を、「科学を文化に」という言葉で表現して発表を締め括った。



⁵ 若手アカデミー委員会
<<http://www.youngacademy-japan.org/>>

アカデミア外における知のオープンアクセスがもたらす未来

堀川 大樹 (慶應義塾大学 SFC 研究所)

研究者、プレイヤーの側から、アカデミア外の動きにフォーカスしつつ、情報をオープンにするとどうなっていくのかと いう話をしたい。



堀川氏は大学からは給料を貰っていない、フリーの研究者である。アカデミックな話をブログ等オンラインで無料提供しつつ、メールマガジンやグッズの販売でマネタイズしている。

オープンアクセスは活動者をエンパワーする(力を与える)。ファンや仲間を増やすやすく、情報が集まりやすくなる。寄付など資金も集まりやすくなり、結果として自身の活動がますます促進される。それを実践しているのが「バイオハッカー」と呼ばれる人々である。アカデミアの外で生物学研究に従事する彼らは、オープンなバイオスペースで、プロジェクトを立てて研究している。情報共有の意識が極めて高く、例えば BioCurious⁶ という海外サービスがあり、情報や仲間が集い、クラウドファンディングで資金を集めベジタリアンのための人工合成チーズを作るプロジェクト等が動いている。

日本でも似た動きがある。例えばニコニコ学会 β であった「昆虫大学むしむし生放送」という企画では、堀川氏を含め遠方にいた出演者の旅費をクラウドファンディングで集めた。資金は主婦やニートからも集まつた。それは出演者がブログを持つ等、自身の情報をオープンにしていた人々だったからで、そうでなければ必要額は集まらなかつただろう。

研究者がブログや SNS を持つて情報発信することもオープンアクセスの実践である。コストゼロで情報を発信し、評価を集め研究にフィードバックできる。氏は「むしブロ」⁷ というブログや「クマムシさん」⁸ という Twitter アカウントを運営し、研究に広く興味を持ってもらえるような記事や、面白おかしい、でもちょっとためになる Tweet を心がけ発信している。そこからぬいぐるみの販売やメールマガジンの購読、あるいは本の出版につながっている。

知の無料提供が評価の獲得につながり、人的・資金的リソースを得て、独立した研究活動を支えていくことになる。より多くの人を研究の世界に巻き込むことにより、知の格差を縮小し、オープンアクセスをさらに促進させ、人類の研究活動の総和も増大していくだろう。

⁶ BioCurious <<http://biocurious.org/>>

⁷ むしブロ <<http://horikawad.hatenadiary.com/>>

⁸ クマムシさん(@kumamushisan)

Twitter <<https://twitter.com/kumamushisan>>

パネルディスカッション

モデレーター:佐藤 翔(同志社大学)

パネリスト:岩崎 秀雄(早稲田大学理工学術院)/山田 俊幸(明治大学米沢嘉博記念図書館)/竹澤 慎一郎(ゼネラルヘルスケア株式会社)/駒井 章治(奈良先端科学技術大学院大学)/堀川 大樹(慶應義塾大学 SFC 研究所)/榎木 英介(近畿大学医学部)

パネルディスカッションでは、研究資金、助成のあり方、雑誌論文と査読、バイオハッカー(DIY バイオを行う人々)、学問の表現形式、オープンアクセスとアカデミアなど、話題が多岐にわたった。以下に紹介する。

佐藤:ディスカッション前の自己紹介。専門は図書館情報学で、オープンアクセスについても研究している。学生の時に、機関リポジトリに登録されたオープンアクセス論文がどのように利用されたかという分析を行ったことがあるが、一般の人の利用が多いという結果になった。自分自身は今年が 20 代最後の年で、2007 年に卒業研究を行った。Twitter や Facebook、ニコニコ動画等のソーシャルネットワークサービスを日常的にチェックし、「面白いと思ったこと」を人と共有する意識、行動がデフォルトとなっている。自分自身も「オープン世代」と呼んでよいだろうと考えている。

佐藤:フロアの方から質問を預かっているのでまずそこから進めたい。ご自身の活動について、政府や行政のサポートは必要ないか?

堀川:くれるというなら(笑)

山田:自分の研究は趣味のようなもの。自分が実行委員を務めているニコニコ学会は大学や企業との共同のかたちで国の支援する研究拠点に参加している。大学職員でもあったので仕事の中で研究費などに関わる予算を扱う機会もあったが、国からの予算は一般に条件が厳しく、活用が難しい印象がある。

竹澤:オープンアクセスジャーナルの運営には資金は大事なので援助はしてほしい。たとえば今の科研費だと学会には電子ジャーナル出版の費用に対して助成があるが、企業はダメとなっている。幅広い援助の方法を検討してほしい。

佐藤:岩崎さんへの質問。不勉強を承知でお尋ねするが、「本当に好きな研究」で、通常のレガシーな研究費を取るために工夫していることは何か。

岩崎:本当に好きなことを書いて取れなかつたら、諦める(笑)生命科学と芸術という、独自のスタンスでこれまで取得できていたが、だんだん厳しくなってきた。art 方面では海外のファンディングにも申請している。クラウドファン

ディングも利用していきたいと考えている。キャッチャーなユーザーのできない研究にむしろ国のサポートがあったほうがよいのではないか。

佐藤:クラウドファンディングという点では、SPP(Science Postprint)には論文に寄付を募るボタンがついているが、実際のところこれはどの程度集まるのか。

竹澤:まず、投稿者に寄付を募るボタンを表示するか要望を受ける。約半数の論文に表示されている。実際の寄付行為はまだごくわずか。

山田:ニコニコ動画の場合はアクセス数などに応じて主催会社から若干の奨励金がもらえる仕組みがある。人気のあるコンテンツになるかどうかがポイント。

岩崎:日本の研究助成事業は省庁縦割りで、助成機関も省庁間をつなぐようなものがない。また分野というこというと、総合大学には美術系の学部がなく、近い距離での相互乗り入れができない。結果として接点がトップダウンでやってくるのが課題だと考えている。

佐藤:駒井さんへの質問。こういう活動を、学術会議にどのようにつなぐことができそうか?

駒井:日本ではまだ政策や学術会議に取り上げるレベルにはなっていないが、現状でどのような活動が起きているかをひとまずきちんと把握したい。

佐藤:登壇者の皆さんから自分以外のご発表についての質問やコメントをお願いしたい。

岩崎:アカデミアにいる人間として、竹澤さんに感想。査読は一般に、実際の査読内容の文章がどこかに公開されることもなく、(学術活動の一環で大きな時間を割くにもかかわらず)報酬も発生しない。SPP にはぜひこのところを実現してほしい。将来的に査読者にキックバックを検討していることだがどの程度を検討しているか。

竹澤:まずは論文の公開後査読を実現させる。その上で、査読内容のランキングを行い、それに応じた対価を支払うということを考えている。

岩崎:レビューが公開されて、それを読んだ人が「これはいいレビューだな」というのがわかればより良いと思う。

堀川:竹澤さんに質問。総合ジャーナルであつたらいいなというものを現実に立ち上げている点で素晴らしいと思う。これらはどのように運営していっているのか。編集、査読委員の集め方、質の担保などを、限られた予算の中でどのように実現しているのか。



竹澤:査読者はその分野の専門家であって、雑誌のブランドによって変わるものではないはず(なので、質は保証される)。雑誌のブランディングについては、地道に、査読の仕組みを作り、他の学会ではできないことをやっていきたい。丁寧にやっていけば評価はついてくると考えている。

山田:バイオハッカーについて、生物系は生命倫理面で色々と厳しいはずだが、DIYでバイオ実験や研究活動を行う上でのトラブルや、ケアがあるのかどうか。

岩崎:バイオテロのリスクの可能性なども考えるとそこは常に悩ましい。ただ、今は「これを作ったら何ができるのか」と考えながら実践している段階で、たとえばとんでもないものを作ろうとしても意外と作れない、というのがラボで実感されたりする。その一方で、様々な実験や失敗への対処法などの共有が行われれば、リスクへの対策ともなるだろう。大学や企業が占有してしまうとそれができない。

竹澤:仕事を持しながらバイオハッカーになろうと思ったらどうしたらよいか。

堀川:何らかの方法で場を作ることが重要。仲間を集め、やりたいことをアピールする、土日バイオという人もいるし、まずお金をしこたま稼ぐという方法もある(実際に海外でそういう人がいる)。

駒井:コンベンショナルな研究をしている身として、その中身をもっといろんな人に知ってもらいたいと考えている。ただ、サイエンスカフェのようにアウトリーチでどこか別の場所に出ていかないと知らないというのではなく、普通に知つてもらえるような仕組みを考えたい。岩崎さんのように、身近なテーマとして fine art を間にはさむのがよいと思ひ、試行錯誤しているが、なかなか交わることができない。他分野の研究者や一般の人に対する興味の喚起について岩崎さんにお伺いしたい。

岩崎:相手の研究者側のスタンスに立ったアプローチが必要と考える。科学者のデフォルトは予め与えられた問い合わせがあり、問い合わせの立て方 자체が論文に収斂するようになっていたりする。アーティストの場合は、真っ白のキャンバス(無)の状態から何かをせねばならないというところからスタートする。その上で、プロセスを見せる、哲学的な問い合わせのことなどに取り組む。そういう意味では、問を立てる訓練はアーティストの方ができているのかもしれない。ただし、science も art も好奇心から始まっていることには違いないはず。表現方法は論文だけではない。

佐藤:非常に興味深い話が進んでいるが、ここで未来に向けての話をしたい。研究のプラットフォームや、若手のサポートの在り方についてなどの議論ができれば。まずは前半の司会をされていた榎木さんからのコメントをいただきたい。

榎木:自分自身は理学部で発生学をやった後、医学部に

入りなおし、現在は病理医。バイオ系の研究状況や、若手研究者問題について関心をもっている。最近の著書『嘘と絶望の生命科学』では、「ピペド」という語(実験のために一日中ピペットをもって実験せざるを得ない現状を表す一種のスラング)を取り上げた。バイオ分野の若手研究者が置かれている状況を象徴しているが、この「ピペド」とオープンアクセスがどう関係するかというと、若手研究者もアカデミアという立場に固執し、現場で追い詰められている。自分自身も、アカデミアから出たら研究できなくなるという思いが非常に強かった。しかし自分がその状況になった1990年代から比べると、2010年代の現在はアカデミアの垣根がかなり低くなってきたように感じる。オープンアクセスが、そのことを可能にしていると感じている。つまりオープンアクセスは、若手にもアカデミアの内外に関わらず研究を続けることができるという希望になっているのではないか。

佐藤:(垣根が低くなるということは)アカデミアの中にも風を吹き込むことになるのでは。

駒井:日本学術会議の若手アカデミー委員会も、学術会議のシニアの先生が国際的な動きを踏まえて若手に作ればどうかと促してきた。アカデミアの中でも動きは出ている。

佐藤:フリーの研究者として改善してほしい点はあるか。

堀川:ジャーナルのオープンアクセス化。Nature Communications 誌が完全オープンアクセスになったように。

佐藤:APC(論文加工料)はだいぶ高いですが。

堀川:しかし、ブランド化されたジャーナルがオープンアクセスになると、掲載論文著者のブランディングも可能になる。そういうアピールの方法があつてもよい。

佐藤:フリーの研究者はジャーナルには投稿しないのか。

堀川:特に成果を論文という形にして投稿しなくてもよいのでは。業績をつくる義務はない。

佐藤:研究成果という点でいうと、芸術系のファンだと発表形態はどのようになるのか。

岩崎:美術系で成果をだすようなものもあるが、海外でもつとアバウトな形(ディスカッションなど)でよいようなものもある。

竹澤:論文雑誌は自由にいろんな人が参加できるようになるといい。高校の科学部などが論文を執筆して掲載できるようになると面白いのではないか。

佐藤:こういった動きに対して、図書館はどうコミットすることができるだろうか?

山田:研究成果の収集の役割を果たすためにアンテナを張っておくこと。まだ研究者の中でも手探りの状況にあるだろうから、すぐに具体的にコミットするというのは難しいか

もしれない。

佐藤: 知の生産のための環境を提供することができるだろうか。共同ラボとか。

山田: 学内の政治的なこと、それを図書館が担当するかどうかという問題があるかもしれないが、それがクリアされたら可能ではないか。

佐藤: 時間が迫ってきたので最後に登壇者の皆さんからひとこと。

岩崎: いろんな表現があるということを楽しめるようになればよい。それが、(駒井さんのスライドにあった)「科学を文化に」ということではないか。

山田: 前職の大学図書館勤務時代から「知のオープン化」ということに興味があり、退職後にもそれらに関わる活動を

行うことができている。世の中全体として面白い方向に進んで行っている気がする。

竹澤: 論文雑誌を運営する一方で研究不正についても関心をもち追いかけていますが、研究不正防止にはラボノートの公開が有効ではないかと考えている。ラボノートを図書館に置いて管理するのも面白いのではないか。

駒井: 本来図書館は中枢にあり、コミュニティという観点からも知の創造を促す場所だと考えている。パブリックにいろんな研究者に来もらえる場、コラボレーションオフィスなどがあると面白い。

堀川: 図書館がひとつのコミュニティの場として機能するようなところになるとよい。

佐藤: 本日はありがとうございました。

企画後記

(微笑) 今回、企画 WG に榎木英介さんをお迎えして豪華若手研究者の皆様によるセミナーを企画することができました。また佐藤翔さんの軽妙なモデレートにより、パネルディスカッションでは研究や科学についての本質的な議論、話題が次々に現れました。会場にはクマムシさんも 2 回 (?) 同席し、会の進行を見守ってくれました。研究とは本来楽しく、様々な表現形式があること、フリー(アマチュア)の研究者であっても表出するプラットフォームがあれば発表すること、などを伺うことができ、大変興味深かったです。

私自身の興味は、医学図書館での勤務経験から、利害や立場の異なる人々によってひとつの場が共有される状態、ということにあります。オープンアクセスによってその場は広がっていますし、図書館も Web も、あるひとつの場であると考えると、今回の内容は、私たちがこれからできることの大きなヒントにもなるように感じました。

土出 郁子(大阪大学附属図書館)

(微笑) 私は SPARC Japan セミナーに参加したことなく、過去にどのようなセミナーであったかさえよく知らないまま企画に参加いたしました。オープンアクセスがテーマのお祭りだと伺い、ならばお話を伺いたい人、会いたい人を呼ばうと思い、講師の方々の人選にアイディアを出させていただきました。

岩崎さんは大学院生時代からの知人で、昔から狭い研究者の枠を超えた活動をされていました。もちろん研究も超一流で、しかも自宅に実験室まで持ち、科学と芸術の垣根を軽々と超えた活動をしています。竹澤さんも、生命科学系博士号取得者でありながら、アカデミアに縛られることなく活動されています。そしてクマムシ博士の堀川さんはもはや著名人。社会の中で研究するという活動を実践されています。山田さんのニコニコ学会 β の話は、もはや博

士号のような学位さえ無意味になるのではないかと感じさせられました。駒井さんにはアカデミアを代表させてしまつて、ちょっと申し訳なかったですが、既存の学術もこうした刺激を受けて変わっていくと確信しています。

オープンアクセスはこうした人たちに力を与え、そして世の中を変えていく基盤になるものだと思っています。未来の研究の希望を抱くことができるひと時でした。この熱を未来につなげていくために行動を続けていきたいと思っています。

榎木 英介(近畿大学医学部)

(微笑) 年に一度の Open Access Week、しかもテーマは“Generation Open”ということで、日本国内でパワフルに活動する若手研究者と SPARC Japan セミナー参加者の皆さんをつなげる楽しいお祭りがしたい、と考えていました。いかがだったでしょうか? 僕自身は、最高に楽しかったです。

研究は楽しいし面白いものだ、それを多くの人と共有しながら進められればもっと楽しい、というのは、自分のような世代の研究者であれば感じている人も多いのではと思います。業績発表へのプレッシャーや既存アカデミアのかなか変われない構造がその楽しさを、焦燥感や閉塞感で押しつぶしてしまったくなっていますが、その閉塞感をぶち壊すヒントが今回のセミナーには含まれていたように思います。

佐藤 翔(同志社大学)

(微笑) 当日参加された方々がツイッターやブログにてコメントを寄せて下さいました。ありがとうございました。

<<http://togetter.com/li/737570>>

<<http://cheb.hatenablog.com/entry/2014/11/09/225850>>

<<http://medister.info/doctorsblog/?p=1663>>

SPARC Japan 事務局



■ 第4回 SPARC Japan セミナー 2014

「グリーンコンテンツの拡大のために我々はなにをすべきか？」

2015年3月9日(月) 国立情報学研究所 12F 会議室 参加者:68名

学術研究活動の中で生成された多様な学術資源のオープン化が、学術的観点からも、社会的要請の観点からも求められてきている。しかしながら、現在の我が国の学術資源の現状を考えると、研究分野によって、また機関・組織によって、オープン化に対する認知や動機・普及状況に大きな意識の差が生じている。また、多くの機関・組織においては、機関・組織内において生成された学術資源が複数のシステムに散在しており、組織的なオープン化推進のためには、横断的な管理体制モデルの構築も急務である。

現在、機関リポジトリに登録されているコンテンツの大半は論文であるが、本来の研究成果は研究データや標本等も含む多様なものである。本セミナーでは、まず学術研究機関が機関リポジトリ等において公開・発信する学術コンテンツを「グリーンコンテンツ」と再定義する。その上で、論文以外の研究データ、博物館資料のメタデータ及び資料画像データ等もオープン化のターゲットとして捉え、コレクション構築や利用促進など、学術資源管理の具体的な道筋を探りたい。本セミナーが、将来における学術資源のオープン化のイメージを共有するための第一歩になれば幸いである。

セミナー概要は以下のとおりです。当日の配布資料等含め詳細は SPARC Japan の web サイトをご覧ください。

(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20150309.html>)

講演

図書館によるデータ管理への道筋

南山 泰之(国立極地研究所)

2002年にBudapest Open Access Initiativeで定義された「オープンアクセス」活動は、その後大きな広がりを見せ、2015年現在において、学術出版に関わる者で知らない人はいない、と言えるまでになっている。さらに、近年においてはより大きな概念である「オープンサイエンス」をキーワードに、従来の論文のオープン化に留まらず、その根拠となるデータや研究プロセスの公開が期待されている。本セミナーでは、データや研究プロセスの公開を通じて、知識の循環・再利用によるイノベーションが期待でき、また他業界との連携が促進される、というオープンサイエンスの理念に呼応した形で、データをキーワードにして研究データ、博物資料などを繋ぐことを試みたい。

では、そもそもなぜデータが重要なのか。近年、研究の根拠であったり成果であったりするデータをもっと効果的に活用したい、という試みを全面に押し出すものとして、「データ中心科学」というあり方が提唱されている。「データ中心科学」では、論文もデータとして扱われ、収集された大規模で複雑なデータに基づき新しいデータが作られる

(データ駆動型の研究)という循環が期待される。一方では、研究データガバナンスの問題として、研究不正への対応・研究の透明性という切り口からも、データの組織的な管理の重要性が再認識されつつある。

上記のようなデータ保存・公開の意義を早くから認識し、海外ではDCC(Digital Curation Centre)、RDA(Research Data Alliance)などの助成機関がデータの公開支援を行っている。これらを受けて大学図書館による取り組みも始まっており、英エジンバラ大学、パデュー大学などでは研究データリポジトリを立ち上げ、積極的なデータ公開支援を行っている。また、国内に目をやれば、研究者や助成機関、博物館等のコミュニティによるデータ公開の取り組みが既にあり、2014年12月頃からは内閣府や国立国会図書館、日本学術会議などにおいても大変活発な検討が行われている。このような現状を踏まえ、国内における大学図書館が果たすべき役割や、他コミュニティとの連携の具体的な手法を検討したい。



大学博物館における学術資料情報のオープン化に関する取組み

山下 俊介(京都大学宇宙総合学研究ユニット)

オープンアクセスやリンクドオープンデータなどの取り組みでは、情報の効率的な共有と活用が目指され、付加的な情報資源の蓄積も期待できる。しかし、完成物としての研究論文やジャーナル、あるいは公共サービスなどの実際業務と一体となって生み出される情報に比べ、博物館資料や学術アーカイブ資料といった手がかかる>学術資料情報を作りだす活動への検討は進んでいない。山下氏は、これまで京都大学総合博物館において、学術アーカイブの構築に携わってきた。大学博物館では、研究プロセスと標本の生成・公開プロセスが密接に関係していること(大学博物館は object-based research の中心)、京都大学総合博物館での約 260 万点に上る学術標本資料の現状を紹介した。学術資料情報のオープン化については、“論文→標本、標本→論文”的関係を維持・確保することが重要であり、例えば分類学では、学名を記載(論文を公開)する際には、証拠標本の情報を論文に記載するという決まり(命名規約)が存在する。

京都大学で現在進めている「京都大学研究資源アーカイブ」は、京都大学における教育研究の過程において収集・作成された様々な資料類を体系的に収集・保存し、新たな教育研究の資源(研究資源)として運用することを目的としている。このプロジェクトでは、既存の学内資料保存施設では対象外となるフィルムや日誌などの資料を収集し、PEEK(研究資源アーカイブデジタルアーカイブシステム)において公開を行っている。氏は、堀田満映像資料(映画フィルム、1960-ca.1982)を例に、植物標本と映像資料を紐付けることの重要性を述べたが、アーカイブ公開における課題としては、固有 ID の付与やアーカイブ資料の階層性(コレクション>シリーズ>アイテムといった階層的記述を含む)と併せて、情報公開に至るまでのコスト負担についても将来的に解決する必要がある。

将来的な展望として、CCR(Connection between Collection and Research)構想が挙げられる。CCR では、タイプ標本(生物の新種記載を行う際に根拠となる標本)以外にも、多様な標本コレクションと研究(成果・データ)を繋



ゲインフラを構築し、研究サイクルとアーカイブ(コレクション生成)のサイクルを一体化的に連携させることを目的としている。これにより、Web 上

のオープン化されている学術資料情報と論文・出版物、博物館での収蔵資料をリンクし、それらの関係性を明確化することが可能となる。学術資料のオープン化に際しては、拡散した学術情報をどのように再集約し実際の学術活動、つまりおおもとの標本などの資料と結びつけていくのかが、大きなカギとなるであろう。コストを要する物資料などのアーカイブ化を促進・支援する枠組み(スキーム)こそが必要であり、本分野の今後の進展が望まれる。

機関リポジトリと DOI

- JaLC における DOI 付与について -

武田 英明(国立情報学研究所)

デジタル化以前は、研究者の最終的な研究成果は論文を意味し、データは論文執筆のための情報にすぎなかった。しかしながら、急激にデジタル化が進みデータが巨大化している現在、データそのものが研究成果となり、論文とデータは一体化してきている。理論科学、実験科学、シミュレーション科学に統いて、近年、データ中心科学が出ている。シミュレーション科学やデータ中心科学の場合は、論文は研究の成果ではなく研究の紹介でしかない。データこそが研究成果である。ではなぜ研究データをオープンにするべきか?を考えると、1)社会的な成果の共有、2)公的資金による成果の公共性、3)研究成果の継承と発展 4)再現性の担保等が理由として挙げられる。



研究データ流通を支える情報基盤のレイヤーとして、メタデータの上位の識別子が重要となりつつある。データを記述するためのメタデータスキーマは多様で、メタデータのみでデータを同定し流通をコントロールすることは困難になりつつある。識別子には DOI の他、ORCID(研究者の識別子)、FundRef(助成団体の識別子)などがある。DOI は識別子からデジタルオブジェクトが存在する URI に変換するサービスである。もともとは出版社が論文識別子を共有するために作った制度であるが、現在は論文にとどまらず様々なデジタルオブジェクトの識別子に成長した。DOI サービスのメリットは、コンテンツへの確実なアクセス手段の提供であり、著者、読者、出版社、助成団体、すべてのステークホルダーにとって大きなメリットがある。

DOI 運営は、全体を統括する IDF(International DOI foundation)、登録機関(Registration Agency)、DOI 付与組織の三層構造になっており、論文の DOI 付与をミッション

としている CrossRef も RA である。その他、データセットへの DOI 付与を目的としている RA に DataCite がある。

ジャパン・リンク・センター (JaLC) も RA で、2012 年に発足し、第 1 段階としては主にジャーナル論文に DOI を付与してきた。2014 年 12 月に新システムに移行すると共に、JaLC は国内の様々な DOI 付与のニーズに対応できるようポリシーを整備した。特に機関リポジトリのコンテンツに DOI が付与できるように拡張されている。JaLC DOI の目指す方向は、研究者の業績の全てをカバーできる DOI である。たとえば科研費等の成果のすべてに DOI を振ることができれば、研究者本人から研究機関、助成団体に有用であろう。

JaLC では、2014 年 10 月より研究データに対する DOI 付与実験プロジェクトも始めている。目標は研究データへの DOI 登録ポリシーの策定と運用フローの確立であり、国内ではおそらく初の分野をこえた研究データ関連機関の連携プロジェクトである。研究データには、メタデータスキーマや、データ粒度、データのライフサイクルと担当者の関係など、論文とは異なる多くの課題があがってきており、その解決にむけてプロジェクトを進めているところである。

研究成果はいずれは「データ」になっていくであろうし、研究データ流通基盤は必須となるであろう。DOI はその流通を指させる重要な要素となっていくと考えている。

パネルディスカッション

＜グリーンコンテンツの拡大に向けて＞

モデレーター：堀井 洋（一般社団法人 学術資源リポジトリ協議会）

パネリスト：林 和弘（科学技術・学術政策研究所）／南山 泰之（国立極地研究所）／山下 俊介（京都大学 宇宙総合学研究ユニット）／武田 英明（国立情報学研究所）

パネルディスカッションに先立ち、林和弘氏（科学技術・学術政策研究所）による「オープンアクセスからオープンサイエンスへ：俯瞰と政策的要点」の紹介、今回のモデレーターでもある堀井洋氏（一般社団法人学術資源リポジトリ協議会）による「学術資料に関連した活動のご紹介」があった。以下に概要を示す。

林氏：国際社会は 2010 年代に入りオープンアクセスからオープンサイエンスに移行しつつあり、市民がサイエンスに意識・無意識的に近づける時代になってきている。近年はサイエンスコミュニケーションなど積極的に市民にコミットする試みもあり、オープンアクセスの時代よりも様々なステークホルダーが関与してきている。

第 4 期科学技術基本計画においてもオープンアクセスの推進に言及はあったが、これを受けた活動は機関リポジ



トリの構築と学会誌の電子化支援にとどまっていた。大きく動きがあったのは 2013 年、G8 のオープンデータ憲章への合意と並行して、G8 科学技術大臣会合においてリサーチデータのオープン化につき日本も合意している。

これらの潮流を踏まえ、今後どのようなことが求められているのか。政策的には、学術面に加え、経済的効果、産業振興、教育効果などとその波及が求められてくる。もっとも、全ての分野の研究者がオープンアクセスによって有利になる訳ではないため、国益という観点からは、今後何をオープンにして何をクローズにするのか、を検討する必要がある。これからは、クローズにすることに理由が求められる時代になるかもしれない。図書館業界としてはデータジャーナルの動向に注目すべきであり、研究データの質、データ作成者の貢献度などといった新しい要素が現れてくるだろう。

堀井氏：学術資源リポジトリ協議会（愛称：Re*poN）は 2014 年 10 月に設立され、大学・企業など学術に関わる人間でデータ化に取り組んでいる。Re*poN ではこれまでに明治～昭和期における科学実験機器資料・教育掛図資料の電子化、金沢大学 virtual museum project の構築などを行ってきており、その他資料の調査分析、メタデータ・デジタルデータの作成、組織間の交渉などを通じて情報基盤の構築・整備を担うことを目指している。研究データ生成の事例としては「加賀藩先祖由緒并一類附帳」があり、科研費で情報の抽出・電子化を行ったものを研究コミュニティ「加賀藩研究ネットワーク」で限定公開している。一般公開への課題としては、1) 汎用的な公開研究データとしての精度・完成度、2) 資料所蔵者・関係者の間での、公開に関する承諾、3) 公開データを作成する労力・コスト負担、があり、データの整形・監修者の存在が重要と考えている。

パネルディスカッションでは、今回のテーマ「グリーンコンテンツの拡大」に即して、様々な立場のパネリストから意見が述べられた。以下、テーマごとに列挙する。

【博物資料や研究データにまで学術資源のオープン化的範囲を広げる意義や目的】

（武田氏）オープン化の流れは国際社会の状況変化によ

るところが大きいが、個人的な興味としては図書館や機関リポジトリがどう対応していくか、どのような意義を見出すのか、というところにある。この問題は、研究プロセスの中に図書館がどこまで関与できるのか、という問題にも関係してくる。また、今後学術分野の独自性は強まるだろうが、共通部分を探ることが重要になるだろう。

(山下氏)博物館においては、以前から資料のデータベース化や公開はなされてきた。オープン化によって、これまでのそした成果が他とどう繋がるのか、を考えるタイミングにきたのではないか。

(南山氏)図書館にとって公開・整理という行為は本質的なものであり、存在意義のようなもの。電子媒体を取り扱う上でも、その役割は変わらない。

(林氏)オープン化による学術分野や関連分野の産業の発展なくしては、研究予算の増加もあり得ない。図書館がどのようにデータに関われるか、という点に関して言えば、データジャーナルで問題になるクオリティコントロールは、データの内容そのものに関するチェックではなく、あくまで様式に関わるもの。様式のチェックに関する知見は、図書館に蓄積されている。

【オープン化への筋道】

(南山氏)オープン化の対象を確定させるためには、オープンとクローズの線引きを急ぐ必要がある。図書館においては、その前提としてまずリポジトリでどの範囲のデータを取り扱うのか、といったポリシー策定を、研究者と連携しながら行う必要がある。実務においては、(そもそも図書館員が主題を理解できれば早いのだが)まずは院生やURAと協力して取り組みたい。

(林氏)データに関しては、データマネジメントプランが必

-----**参加者から**-----

(大学/図書館関係)

・大変充実したセミナーで大いに勉強になりました。

Re*poNについても初耳でしたし、オープンサイエンスの動きなども教えて頂き、わずか4時間で最近の動きや課題、ニュースまで手に入れることができるのがたいセミナーでした。

・直接すぐに業務に反映するような内容ではありませんでしたが、世界のトレンドや、今後の日本の動きが分かり刺激を受けた。

・思っていたよりも概念的な内容が多いと思った。全体像をつかむのには良かった。

(大学/大学・教育関係)

要。研究を計画する時点から図書館が関わる必要があり、これに関するトレーニングは一つの提案になる。ポリシー策定は、アクションプランとしてURAと協力すべき。

【博物資料の孤兎化対応】

・作成者と連絡が取れず、ライセンス処理ができない資料をどう取り扱うか。

(山下氏)難しい問題。現在はアーカイブ化対象資料の公募時に公開可能、権利処理可能なものを優先的に選ぶことで対応している。

(林氏)筋としては文化庁裁定になるが、過去に学会論文で同様の事例があった際には、ネット上の告知で対応した。論文であれば訴訟リスクは少ないと考えての対応だが、博物館資料ではわからないのであまりお勧めできない。

(フロア)学術流通に関する内容なので、公開に問題があるとも思えない。まず公開してしまい、クレームがあつた際に誠意を持って対応すれば良いのではないか。

【博物資料公開のプライオリティ】

(山下氏)研究論文等に使用されるタイプ標本・資料に関する情報を優先的に公開することも必要ではないか。

(堀井氏)学術情報の公開に際しては、その資料の概要的な情報の公開からはじめて、状況に応じて段階的に公開情報の内容を詳細にしていく方法もあると考える。

議論も尽きないところではあったが、最後に各パネリストからデータ管理に関する決意表明がなされ、ディスカッションは終了となった。

・データ公開に関する様々な課題がわかつた。

(大学/その他)

・政策としてサイエンスデータのオープン化への流れが既にあることに気付かせてもらい有益だった。

(大学/学術誌編集関係)

・研究データのシェアに関する世界の潮流を理解することが出来ました。雑誌の編集の立場からは、この流れに対しどのようなことが出来るのか考えさせられました。(データジャーナルの刊行? リポジトリへのデータ提供を著者に呼びかける?)ただ研究者の間ではデータのシェアについてはあまり話題になってないよう感じます。

(企業/大学・教育関係)

・政策レベルでどのような動きになっているかについての話を興味深く聞かせていただいた。大きな潮流の中で図書館がどう動くべきかという問いはこのような俯瞰的な観点が必要。

(企業/その他)

・グリーンコンテンツの現状や今後についてよくわかった。
(その他/図書館関係)
・機関リポジトリを進める上で、必要な考え方、研究データの扱いを考える必要性に気付かされました。

企画後記

（） 実は SPARC Japan に参加するのは、これが初めてで「なるほど、こういう場なんだ」というのが感想です。

それはさておき、最近、いろいろな方向から研究データの話がやってくるのですが、考えれば考えるほどデータと論文のとりあつかいの違いを強く感じます。でも、ものすごく大事な話だということも日々感じています。そもそも論文がいつまでも学術情報の中心でありつづけるのかどうかが、わからなくなっています。

三角 太郎（千葉大学附属図書館）

（） データのオープン化がテーマ、ということで始まった本セミナーの企画でしたが、並行して国内の関係機関が急速な動きを見せ、日ごとに情報を追いかけながらの準備となりました。将来のデータ管理を様々な立場から議論する、という楽しさを皆様と共有できていきましたら、大変嬉しく思います。

南山 泰之（国立極地研究所）

（） 企画 WG はもとより、SPARC Japan セミナーへの参加自体も初めてでしたが、色々と刺激的な体験をすることができました。今回のセミナーでは、オープン化の対象範囲に博物資料も（！？）ということで、一般社団法人学術資源リポジトリ協議会のメンバーでもある京都大学山下先生とともに、博物資料に関する現状と課題を少しでも多くの参加者の方々にお伝えしたいと考えました。古文書や標本などのアナログな資料をネットワーク上で扱えるようにするには、多くの人々の努力と協力が必要です。パネルディスカッションでの議論が纏まらなかつたことは、大変申し訳なく思っておりますが、今後も様々な立場の人間が学術情報のオープン化について、ざくばらんに楽しく議論できる場が形成されることを切望します。

堀井 洋（一般社団法人 学術資源リポジトリ協議会）

国際学術情報流通基盤整備事業（SPARC Japan）年報
—平成 26（2014）年度—

平成 27 年 9 月

発行 大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋 2 丁目 1 番 2 号
TEL 03-4212-2351
FAX 03-4212-2375
E-mail sparc@nii.ac.jp
